

## はじめに

2007 年春のスペイン旅行は、団体ツアーだったので、ただ、追い回されたような、鼻面を引き回されたような印象が強く、特に美術館の見学時間の短さに不満が募り、次回は個人旅行すると誓ったものだった。これまでに交際したアメリカ人のほとんどは、陽気で好感が持てたが、その国を訪ねたいという気持ちは全くなかった。北欧旅行に興味があったが、カミさんの希望があったし、金婚式をニューヨークということも悪くないなと思い、今回の旅行となった。

旅行計画に先立ち、2008 年にはいって、ボチボチ資料を読み始め、2 月のアタマに格安航空券を探し、JTB を介して予約した。アメリカン・エアラインズの便で、4 月 13 日(日)成田発、5 月 5 日(月)帰国、ロスアンゼルス、サンフランシスコ、ニューヨーク経由で諸経費込み一人 145,000 円を選んだ。

インターネットで検索、「E-チケット」を購入し、航空会社が発給する日程表が航空券代わりとなるのである。したがって、航空券はない、だから航空券を紛失することはない。

さらに、今日買って明日出発することができれば、この行程で約半額となる。そうしたいが私はいいとしても女連れではそうもいかない。それでも、まともに買う場合より遥かに安い。

計画をペーパーにしたのは、3 月にはいってからで、これは何度も手直しを重ねた。

ホテルのキャンセルやオプションのキャンセルは 5 件もあり、キャンセル料 65 ドルがかかったが、それよりメールのやり取りが面倒だった。

## 諸準備項目

アメリカ旅行参考携帯資料集目録の作成

現地での交通・注意事項の作成

2008 年春季 U.S.A.旅行総括表の作成

Hotels Item の作成

デリー・スケジュール表の作成

英文メモ(タクシー運転手に行き先を示すものなど)の作成

携行品のチェック

最小限にするという方針だったが...

パスポート紛失に備え、写真や戸籍謄本の準備

トラベラーズ・チェック(アメリカン・エクスプレス)の購入

米ドルの購入

携行薬品:馬が食うほど持参したが、幸い元気で常用以外使用せず。

風邪薬(総合、熱、のど、抗生物質)など 10 数種類

モバイル:この旅行のために購入、ところがまったくインターネットに繋げず、持ち腐れ。

携帯電話:この旅行のために購入したのに、携行しなかった。なぜだろう？

X-5 日までに準備万端相整い、駄洒落が出始めたので、ノートしこれを英訳した。

また、英語の諺を印刷した。

4 月 25 日は母の命日、繰り上げて墓参した。

出発前日の 12 日午前 ABC 航空が手荷物を引き取りにやってきた。夕刻、戸締り、書置き、パソコンの電源オフ。マイカーのバッテリーのターミナルを外した。郵便物の局留め手続き。近所に留守する旨ご連絡。

4 月 13 日朝、携帯電話の電源オフ。以上はチェック表にしたがって実施。

旅立ちや片付けぬまま春炬燵

When started on the trip of the spring, the KOTATSU in order.

第 1 日 4 月 13 日 日曜日 成田空港からロサンゼルス空港へ

たたみとは心地よきもの花疲れ

Tatami mat is a comfortable especially when be tired after a cherry blossom viewing.

これは今朝の読売歌壇の俳句を拝借転載したもの、旅の空ではこんな夢を見るのだろうか。

10:04 のバスで出発、池袋、日暮里経由で成田第 2 ターミナルへ。第 1 の仕事は、昨日業者に運送を依頼した携帯手荷物バッグを引き取ることである。3 階北側の ABC カウンターでバッグ 1 個を引き取り、帰りの運送も依頼、往復運賃バッグ 1 個の料金 3,450 円を支払い、領収書を受け取り、大事に保管した。次は、搭乗券の発券と、手荷物預けの手続き。インターネットで申し込む場合、航空券は発行されない。原則として、自分で搭乗券発券コンピュータを操作することになっている。

アメリカン航空のカウンターは南側なので、コンコースを 200m 余り移動した。セルフ・チェックインのコーナーには、数十台のコンピュータが並んでいるがガラガラである。いちおう入力の仕方を勉強したつもりであったが、うまくいかない。もたもたしていたら、スタッフが来て入力してくれた。座席 26E と 26F の搭乗券が出てきた。搭乗券、パスポートそれと預けるバッグ 2 個を持って手荷物カウンターに行くと、すでに荷札が印刷されていて、簡単にクリアした。

**あなた！どこへ行くの？の巻** 身体検査、入管の出国審査も問題なかった。「行ってらっしゃい」と言われて出国エリアに進む。テイクオフまで何時間もあるので、ぶらぶらと 93 番ゲートに向かったと言いたいが、実は、われながら不可解な行動をとったのである。荷物を預けたのち出国ゲートへ行くのだが、何をとまどったのか、いきなりレストランや売店がある階へのエスカレーターに乗ってしまったのである。カミさんもくっついて登りかけ「どこへ行くの？」と聞いたので、われにかえり下りのエスカレーターでトンボ帰りしたのである。カミさんは何もいわなかったが、頭がおかしくなったと思ったかもしれない。私は単なる加齢現象だと思っているけど……。

あちこち歩き回っているうちに AA170 便が定刻となり搭乗開始、機体は JAL に比較すると見劣りがする。この便は日本航空と共同運航なので、日本語の説明、日本食、日本人乗務員とそろっている。16:22 離陸、北東に機首を向け偏西風に乗り北米大陸へ。成田からロサンゼルスまでは 5,444 マイル、8,761km、時速最高 1,100km、予定飛行時間は 9 時間 55 分である。機内は冷え過ぎ、靴下を 2 枚履く。私たちの席 26 番の後ろは隔壁なので、椅子を後ろへ倒せない。

**エコノミー大風呂敷で旅をする** JAL より劣るこの機体には、フットレスト(足乗せ)がないので、風呂敷で代用。これはすぐれもので足の血行を妨げないように使用するのである。各自の座席の前、前の席の背中には収納式のデスクがあり、左右に支えの金具があるので、そこに斜めに折った大版の風呂敷の両端を結びつけて、その帯の上に足の裏を乗せるのである。そうすると、腿の裏側が座席から浮くので、脚部の血流が妨げられない、すなわち疲れないのである。

こんな話がある人が、風呂敷の中に機内備え付けの雑誌を巻き込むと、さらに上等になりますよと、教えてくれた。もちろんエコノミー症候群対策にもなる。私は 10 年来愛用していたが、昨年のスペイン旅行の JAL 便ではフットレストがあり、お役御免なのかと風呂敷を悼んだものだった。ファーストクラスやビジネスクラスを利用する人には関係がない話である。

**故ありてヘッドレストに工夫あり** フットレストがないと悪口をたたいたが、AA 便には短足の乗客が少なく、お客のニーズがないのだろうと思う。そして JAL には短足が多いということだろう。しかし、

背もたれの上に枕が別についていて、その枕は上下するし、その両端は前方へ曲げることができるようになっている。すなわち、頭が左右に倒れないようにするためであろう。狭い座席で隣の席の臭い若者などが寄りかかってきたら、まことに困った旅になる。こういう苦情に対応したのだろう。欧米人は他人と接触することを、とても嫌うようだ。

**朝も夜も東の空からやってくる** 日本では太平洋からやってくる。ロスは日本との時差が 16 時間遅れとなるが、夏時間採用のため、私の 4 月 23 日は 24 時間プラス 7 時間で 31 時間と長い。帰りはニューヨークからだから、5 月 4 日は 15 時間しかないのだ。暇な人は計算してください。間違っているかもしれないから。また、ロスは東京より 8 時間前に夜が明けると理解したほうがわかりやすいと思う。日本では夜も昼も太平洋からやってくるのである。日本時間 18:00 夕食(すし 2 貫、パン、肉じゃが、サラダケーキ、グリーンティ、水)は軽食と書いてあったが、後期高齢者としては充分の量であった。

**アイマスク熟睡している棚の上** 隣席の学生らしい白人の女性は、ぶっ通しで勉強していた。やせて無愛想で性格ブスだなと思った。カミさんはアイマスクをして少し眠ったようだが、私は横でライトが点いているので眠れなかった。私のアイマスクがリュックの中で眠っているからである。リュックは上の収納ケースに入れてあり、リュックを下ろしたり上げたりできる機内の雰囲気ではなかった。しかし、宝の持ち腐れだったって、言うほどのことでもない。

**機長報告:09:43 到着予定、現地は 27**、暑いようだ。ショックがないほど上手に着陸、28。めでたくアメリカ合衆国ロサンゼルス国際空港到着。41 番ゲートに向かうが飛行機は滑走路を出るとエンジンを切り自動車が牽引した。

**カミさんの言うこと聞かず大失敗** 入国審査では「U.S. Customs & Boarder Protection」(税関申告書)を用意していなかったのだから、バタバタした。列に並んでいるとき、カミさんが「みんな 2 枚持っているよ」と言ったが「申告するものはないよ」と無視した。そのうちに、並んでいる人を係員がチェックにきた。「申告するものがなくても書いてください」と言われて、用紙をもらい慌てて書き込んでいると、列外に出て書くように注意された。カミさんのいうことは常に正しいということがわかった。だいぶ後回しにされてようやく順番が来た。その様子を審査官が見ていたためか、植物検疫の方にも回された。数人の係官が「フード？」と何回か聞いた。解らないふりしているとニヤニヤしながら。「ミカン？」と聞いたので「ノーミカン」と答えたら、「オッケー」と、バッグを開けるともいわず通過できた。カミさんはバッグの底の方にレトルトのご飯、カレー、インスタント味噌汁、お茶のティーバッグ、センベイなどを詰め込んでいたので「開ける」といわれたらどうしようとドキドキしていたようだ。

**スリッパの予備まで用意のおそろしさ** スリッパの片方を機内に忘れてきたので、残った片方は捨てたが、カミさんが予備を持っていたので間に合うことになった。しかし、スリッパを忘れることまで想定して用意しているとはビックリ。失くしたスリッパは席を離れるとき苦労して席の下から拾いあげたものであり、それがまた、なくなるというのだから、よほど縁がなかったに違いない。スリッパは私が泊まるホテルには備え付けられていない。しかし、部屋に入ってから靴を履いている気にはなれない。いくら絨毯がキレイにみえても、靴下や裸足で歩くと足が汚れるのでスリッパは重宝なのである。

**Map は絶対** ロサンゼルス国際空港は市の中心であるダウンタウンの南西 20km にあり、日本とは週 70 便もある。カミさんはホテルまでタクシーで行きたいと言ったが、私は、「出発前に計画表を説明しているじゃないか。ユニオン駅のインフォメーションで Map を手に入れるのだ。」と無視、Fly Away という空港からユニオン駅までのノンストップバスに乗ることにした。

**とつ国や慌てふためく旅初め** すぐに Fly Away バスが到着、黒い大デブのオバチャンが降りてきて、車体の下のトランクを開き、「荷物は自分で積みなさい」と指示した。私は真っ先に大小 2 個のバッグを積みこんで、隣の人に「このバスはユニオン駅行きですか？」と念押ししたら、別の人が「ノー、このバスの後ろのバスがユニオン駅行きですよ」教えてくれたので大慌て。最初に積んだのでバッグは奥の方に押し込まれている。カミさんに逆らったら祟りがあることを忘れていたと後悔したが後の祭り。私は大きなリュックを背負ったまま、腰をかがめてバッグを引っ張り出した。カミさんは私が頭をドアにぶっつけないように懸命にアタマを抑えていたそう。やっと乗りかえて、バスが高速道路にかかると快適なドライブとなり、どうやらカミさんのご機嫌は回復したようだった。外はまるで熱帯、椰子の木、コンクリートは打ったまま、道路はアスファルトを敷いていないので、高速道路は白っぽくデコボコではないがガタガタである。

ともかくユニオン駅に到着、下車、料金は近くのチケット売り場で 1 人 4 ドルを払い領収書をドライバーに渡すシステム。駅内でインフォメーションを探すがさっぱりわからない。あきらめてタクシー乗り場に行く途中に鉄道の案内所があり、お目当てのバスマップを貰うことができた。そこまでの地下道数百メートルあまり重いバッグを引っ張った。カミさんは黙ってしまった。相当に怒っているようだ。しかし、団体ツアーではないから、メトロ Map とバス Map は絶対必要なのである。譲るわけにはいかない。

**記録的な暑さ** タクシー代チップ込み、13 ドルでようやく今晚の宿「Comfort Inn Los Angeles City Center」に到着した。ブッチャー(予約確認メール)を示したら、午後 1 時頃だったがチェックイン OK だった。229 号室は西日があたる部屋。暑いロスでも今日は記録的な暑さだったとテレビが報じていた。子供たちが中庭のプールで泳いでいた。

**旅行けば夫婦喧嘩の花が咲く** カミさんは「疲れた～」とベッドに横になっている。私はバッグを開いて、中のものを備え付けのタンスに移した。テレビは画面が流れよく映らない。コーヒー沸かしの電源の接触もよくない。しかし、シャワーにかかりサッパリした。水を買うため廊下の自動販売機にお金を入れてもボトルはでてこない。入れた 1 ドル 25 セントは捨てたようなもの。ホテルの従業員にお金が戻ってこないと訴えてもヘラヘラ笑うばかり。バカくさくなって泣き寝入りである。飲み水はないし、カミさんに「さあ、出よう」と声をかけたが、「一人で行きなさい」という返事。「今日の予定を回っておかないと...」という、「こんな強行軍なら、ついてくるんじゃない...」というので、カッとやりかけたが、我慢して角のコンビニで水を買ってきた。500cc でなんと 3 ドル、でないコイン分と合わせて 4 ドル 25 セント、500 円である。1 リットル 1,000 円。後でわかったのであるが、少し離れたスーパーでは 500cc 6 本で 99 セントだったから 18 倍である。細かくなるが、3,000cc で 100 円、1 リットル 33 円。

**グレイハウンド・バス** 4 時ころになると、ギラギラしていた日差しも幾分か和らいできたので、カミさんも元気をとりもどし、「今からでかけてもいい」といった。ラスベガス行きのチケットを予約購入するためグレイハウンド・バス・ターミナルへ。バスは 51 番、料金箱に 1 ドル 25 セントを入れる。運転手が 7 番通りで 60 番のバスに乗り換えなさいと教えてくれた。言われたところでバスを待っているとき、そばの人に聞くと親切なオバサンで、私も同じバスに乗ります、3 つ先の停留所だと教えてくれた。また、それぞれ 1 ドル 25 セントだして乗る。10 個くらい先の停留所だった。あとで理解したのだが、このオバサンは 760 番の急行バスの停留所の数を教えたのだった。60 番は各駅停車の鈍行バスで、700 番台がくっついたら急行なのである。

グレイハウンド・バス、灰色の猟犬マークで有名なこのバスはアメリカ、カナダを縦横に走る長距離バスである。ロサンゼルス発シカゴ行きという何千キロも走る路線もある。バスを予約するにはパスポートなど顔写真付の ID カードが必要である。名前、行先、往復、発車時間を書いたメモを予約

係りの黒人女性に渡したが、いろいろ質問するのでうまく答えられない。相手の言うことがわからないのである。とうとう案内カウンターの白人のおじいさんのところに回された。その人はゆっくり質問してくれたので、会話が成立した。私が渡したメモの確認作業に過ぎないのである。とにかく、黒人とスパニッシュは好きになれない。ところが、私たちの旅で接触したのは、この人たちと東洋人ばかり、この人たちしかいないアメリカを旅したようなものだった。地元の白人は、こういう街を嫌って、郊外の住宅地に移り、こうしたダウントウンには出てこないのだろう。ラスベガス往復のバス代はシニア料金一人 58 ドル、クレジットカード払い。

### ともかくも アイム シニア！ 言えばよい

これでラスベガス行きが保証されてやれやれ。少しお腹が空いてきたので、バスの待合室の食堂で軽いパンのようなものを注文してホテルに帰ることにした。あたりは薄暗くなり、バス停近くには浮浪者が数人いて、気持ちの悪いところであった。おなじ道順で帰ることにし、バスを待つ。私が先に乗り 1 ドル 25 セント入れようとしたら、ドライバーが「ユーアーシニア トエンティファイブ オンリー」といった。それで 25 セント硬貨を 1 枚入れた。カミさんには「1ドル入れる」といったので、「アイム セブンティー」とかいったら「オー セブンティー！！ トエンティファイブ OK！」とかなんとかであった。かくして、その後はどこでも「アイム シニア！」と叫ぶこととなったのである。

### 苦勞した計画無視され沈思する

こんな第 1 日の日が暮れた。私が今まで苦勞して作った計画は、カミさんも了解していると考えていたのが間違いの元、かくのごとく第 1 日目から簡単に崩れ去ったのである。無念。カミさんには私の計画なんか最初から眼中になかったのである。しかし、カミさんが病人であることを忘れて計画したのであるからと、唇を噛んだ。

---

## 4 月 14 日 (月曜日) ロサンゼルス

Sunrise breakfast、熟睡したのかしなかったのか、とにかく 5 時ころ起床、6 時半からのバイキングには一番乗り。実はこのホテルが朝食つきとは知らなかった。昨日到着して、ホテルの看板に「Sunrise Breakfast」と書いてあったので、朝早い食事があるなど、わかったのである。なんだか儲かったような気がした。二人 4 泊だから 80 ドルくらいに相当するのかな。パンにはたっぷりと蜂蜜をかけ、オレンジジュースを 2 杯、ヨーグルト一個、バナナ 1 本、りんご 1 個、コーヒーという献立を選ぶ。これで、お腹に力が入りガスもでた。ガス抜きしてすっきりだ。

さてと、ユニオン駅で手に入れたバス Map を広げ、日本で購入し勉強した分厚いガイドブックと重ねて、行き先と交通機関を決めた。まず、ヨコハマにも寄港したことがある世界一の豪華客船クイーンメリー号がホテルとなっているロス郊外南へ 30km のロングビーチから観光を始めることにした。

**ロングビーチ** 地図から考えると、アメリカ西海岸の大きな港は、北からシアトル、サンフランシスコ(オークランド)、ロス(ロングビーチ)である。そこを拠点に内陸へ交通網が延びて人や貨物の流通が行われているのである。その他の海岸は、海水浴ができるビーチが続いているので、地中海北岸のリゾートのようなものではないかと思う。クォーター 1 枚(25 セント = 30 円)入れて、51 番バスでダウントウンの 7 番通りへ行き、760 番バスに乗って南下した。その終点がアルテシアという地下鉄ブルーラインの駅である。ちなみにロスには 5 本の地下鉄があり、レッドとかイエローなどと路線を色で識別している。ここは無人駅で自動切符販売機があるだけ。1 ドル 25 セントでシニア割引なし。うろろうしている我々に、地下鉄の切符の買い方を教えてくれたサングラスの褐色人のオッサンは、5 ドルのデイパスを見せ、これを買えという。ロングビーチ市 Transit mall で下車、Public Parking のオニイチャンに Queen Mary 号へ行くバス停を聞くと、すぐそこに案内所があるので、そ

こで聞いてくれと答えた。

案内所では白人のオバサンが一人いて親切に案内してくれた。Pine Street のレストラン前からレッドバス「C」ラインに乗るよにとのこと。無料のレッドバスに乗り換えて、ロスアンゼルス川の橋「Queens way Bridge」を渡り、水族館などがある Shoreline Aquatic of the Pacific という公園地区をぐるぐる回りながら終点のクイーンメリー号広場に到着した。途中で、とんかつ屋「和幸」があった。

**クイーンメリー号** 全長300m以上もある船体は、岸壁に固定されホテルに転身している。大きな駐車場はガラガラ、まだ観光シーズンには早いようだ。珍しい花々が咲き乱れている。クイーンメリーと岸壁との間には旧ソ連の潜水艦が繋がれ10ドルで見学できる。アメリカは面白い国だなと感じた。なお、クイーンメリーの乗船入場料は18ドルである。ところが4階がレストラン街になっていて、入場は無料。岸壁にタワーがあり、エレベーターで4階にあがると船体への連絡橋があり、そこから船内に入るのである。そこはポートデッキで、船橋から船尾まで約200mの木甲板である。67年も昔のこと、海水ホースを持つ当直士官に追いまわされて、半分に割った椰子の実で甲板を磨いた練習船時代を思い出す。本船のデッキは全部木甲板、船体は鋸接、とにかくすばらしい。QUEEN MARY CLUB というレストランで真っ青なロスアンゼルス川を隔てたロングビーチのビルを眺めながらのランチ、Philadelphia Beef sandwichなどを注文、チップこみで60ドルとちょっと贅沢した。

**パサデナ** ロスの山の手パサデナ、山は冠雪、ロスから北の方角の山は冠雪している。シエラネバダ山脈だそう。スペインにも同じ名前の山脈があるから、それを真似たのだと思う。そういうことで、次は北のパサデナに向かった。そこには当初予約し、その後キャンセルしたホテルがある古い立派な町である。あとから思ったことだが、キャンセルせずに、ここのホテルを選択すべきだった。ロングビーチから1ドル25セント払って、地下鉄ブルーライン、イエローラインと乗り継ぎ、約50km移動。パサデナのメモリアル公園駅で下車したが、方角を失い、歩きまわったが目的の場所へ行くことができず、そのうちカミさんはすっかり疲れ果てて座り込んだので、ユニオン駅に引き返した。静かな美しい街、しかし、道路はとてつもなく広く人は見かけず、妙に感心して納得した。

ハリウッドは田舎町、ダウントウンから780番のバスでハリウッドへ。ハリウッド、ビバリーヒルズ、デイズニールランドとか、ショッピング街などには、カミさんも私もまったく興味がないという点では共通している。しかし、話の種を仕入れに行くことにした。25セント入れたら運転手が50セントだということで、もたもたしていたら「ネクスト」といった。意識すれば「もういいよ」ということだろう。しかし、カミさん分と合計して50セントぐらいを見逃してもらっても活券に関わるので、カミさんと小銭をかき集めて不足分を払い、日本人の誇りを保ったが、とにかく暑い！

15:40 ハリウッド・ハイランドで下車、シネマ・センター・バビロン・コートの見晴らしのいい場所で休憩、ビルの中央部に噴水がある広場があり、大きな白い象の像が中天にある。いい写真が撮れそうところである。コカコーラは4ドル50セント。テーブルが汚れていた。噴水では子供たちがびしょ濡れになって喜んで、親も喜んで。私もその光景に疲れが癒された。買い物や見世物に興味がないのでハリウッドもここだけ、この暑いのに人がウジャウジャいた。まるで浅草とか成田さんみたいに小さい店がぎっしり立ち並んでいるところ。田舎の賑わいである。1時間ほど休憩して再び780番バスでダウントウンに向かった。ビバリーヒルズ辺りのスターの豪邸を回るツアーがあるが敬遠。

**アンビリバブルなハプニング** ここで信じられないことが起こった。ラスベガスの資金にと、見知らぬ女性からドルを恵まれたのである。720番のバスの中、ダウントウンの6番通りで下車するつもりが、早とちりして一つ手前の停留所で下車、方角の見当がつかず又もやウロウロである。15分も歩き回って再度720番バスに乗ったのだが、25セント差し出したら運転手が50セントだということで、またもやモタモタしていたら、褐色の肌をした小柄の年配の婦人が25セント硬貨2枚を差し出して、

これを使えという。こちらは2人で1ドルだから、ノーサンキューと辞退した。その後ご婦人はわれわれに話かけてきたので、適当に対応していたが、この人が下車する前に、カミさんに左手で握手を求めたあと、右手で札束と硬貨を渡し、『ラスベガスで幸運を』といってバスを降りていったのである。アット言う間のことで、カミさんも私もビックリ、混んだ車内の人たちも驚いていた。カミさんがどうしようと言いながら札束を数えてみると1ドル札が11枚と硬貨が2ドルくらいであった。私は高額ではなかったのにホットして、とりあえず受け取って善意を生かそうと提言したが、このショックはラスベガスでは博打はしないぞということになったのである。100ドルも1000ドルも同じ大きさ同じ色だから、バスに乗り合わせた人たちも、いろいろ勘ぐったに違いないと思う。カミさんは1ドル札をわざと皆に見えるように広げていた。

**禍福はあざなえる縄のごとし** いいことは続かない。ダウタウン6番通りで下車したら、もう薄暗く人影もなくまたまた迷子、とにかく歩いて7番通りに到着、そこから51番バスでホテルに帰るつもりだったのに、30分待ってもこないの、しびれを切らして、地下鉄で帰ることにした。周りは真っ暗である。明るさといえば、米国の町には街灯はあるものの道が広いので暗い。また、地下鉄なんかは特に暗く感じた。7番通りは、5本の地下鉄全部乗り入れている中心地中の中心である。米国で唯一明るい町はニューヨークのタイムズスクエアだけだと思う。日本は道が狭いから明るく感じるのだと思う。ここから西へひとつの West Lake MacArthur Park 駅で降り500mほど引き返すとホテルである。ここはコリアンタウンの入口であるが、ヒスパニックのほうが断然多い。牛丼の吉野家や99セントというスーパーがあり大賑わいである。途中酒屋に寄ってビール、バドワイザー500ccを2本単価3,50ドルを買う。酒屋はリカーショップという看板がでている。この近くには割合この看板をみかけたが、サンフランシスコやニューヨークでは探すのが大変だった。昔の日本みたいだ。カミさんは水1ガロン入り(3.78l、1.35ドル)を買い、私が持った。21:00 ホテルにもどったが、どこにいても黒いゴリラがいっぱいいるという印象だった。

**頭のネジが弛んでいるようだ！** シャワーが気持ちいい。モバイルは接続できぬ。(帰国後わかったのだが、PCカードが必要だったのだ。)

移動するたびに、迷って歩く一日だった。帰国してバスMapを仔細に見ると、ヒントがあって、迷うことが不思議という仕掛けになっているのに、よく読んでいなかったため、こんなことを繰り返していたのである。私は慎重にものごとを考えかつ努力もするが、どこかのネジを締め忘れてたり、ネジが緩んでいるのに気がつかないところがある。こんな欠点がモロにでた一日だ。

**なぜ、タクシーに乗らないのか？** バスに乗って下車しては迷うことを繰り返しては、時間の無駄。もっと効率よく観光すべきではないかという疑問があると思うので書き添えておきたい。

こちらの意思を運転手に伝える語学力がないので、乗りたくない。

バスに乗ると、住民とのふれあいがあるのでバスがいい。

旅は失敗の連続でいい、話の種ができる。金銭で損してもそれは取材費なのである。

ついでに**観光について**

見世物、買物、食物にはあまり興味がない。

国情、建造物、住民、自然に大きな興味がある。

---

**4月15日 火曜日 今日も快晴**

今日は美しいと評判の海浜リゾート・サンタ・モニカ、U.C.L.A.、オリビエラ通り、City Hallを回る計画で出発。歩き回っているせいか体調がいい。土地勘もわかってきた。

**サンタ・モニカ** 白人は10人に1人も見かけないロス、サンタ・モニカは20kmほど西である。マッカ

ーサー公園から720番のバス1本で行くことができる。50セントである。シニア料金は時間帯で25セントだったり50セントだったりするらしい。近づくにつれ、高い椰子の木が整然と立ち並んで、熱帯を感じさせる。モーターが軒を連ね大きな町を形成している。サンタ・モニカ市内に入ると、ゴミもなく、歩道は磨かれていて、さすがリゾート街だと感心した。海岸で下車。

切り立った高さ100mほどの断崖の下が海浜である。断崖の上にも下にも大きな道路がある。断崖の上は公園で遊歩道がある。そこからの眺望は太平洋を一望できる。北も南も砂浜だけである。海岸線から直角にサンタ・モニカ・ピアという突堤が海中に築かれ、そこが遊園地となっている。今朝の新聞は、そこが売りに出されていると報じていた。遊歩道を1kmほど歩いてみたが、異国情緒たっぷりの花が咲き乱れ、栗鼠や小鳥がのんびりと遊んでいて人を恐れない。こういう雰囲気では、つい口笛を吹き上を向いて歩きたくなる。ところが、いたるところに黒人のホームレスがいるのである。ゴロゴロしていた。上を向いて歩こうものなら、この人たちを踏みつけることになる。

**U.C.L.A.** 1時間ほど散策し、別のバスでU.C.L.A.ロスアンゼルス校へ。同校近くのバス停で無料バスに乗り換えたまではよかったが、ひとつ乗り越して、また迷い、かなり歩いたのでカミさんが疲れ果て、キャンパス見学はちょっとだけ。私は病気のカミさんのことを、すぐ忘れてしまう。

**オリビエラ通り** ガイドブックにあるダウンタウンの名所見学に向かう。ユニオン駅は東京駅みたいな駅で、ここから各地への列車が走るが、日本のように数分ごとに発着するようなことはない。この駅の正門前にオリビエラ通りがある。どうしてこんなところがガイドブックで名所として紹介されているか、理解できないくらい小規模な天幕の店揃いである。全部あわせても日本のスーパーよりはるかに狭い。

**シティホールとロス市警** 少し歩くとシビックセンターというか、市役所とか警察署とかの官庁の巨大なビルがある。市役所からの展望が最高だそうである。

中央玄関から入る。玄関ホールは検問所で占められ、数人の警官がいた。写真つき身分証明書、外国人はパスポートを見せ、身体検査を受け、チェックにパスすると、記帳され、ワッペンを渡され、どうぞとなるのである。どうしたら尖塔の展望台にいけるかわからないので、聞きまわって、やっと26階にたどり着いた。庁舎のエレベーターで22階に行き、そこからエスカレーターで上がり、そこにあるエレベーターで26階に上がり、そこからは階段で市長の間など2階あがると最高階のホールで、ドアを開ければ展望回廊にでることができるのである。日本の市役所だと、大きなフロアの中央に案内所があったり、そこから市民が届けなど出すカウンターが見え、人がたくさんいるというところだが、ここは廊下ばかりで、おまけに事務室側には全く窓がなく、巨大な重そうな扉が、ところどころにあるだけである。ときどきその扉が開き、トイレにいくであろう女性職員を見かけるだけであり、質問もままならなかった。

ようやく展望フロアに辿りついたが誰ひとりいなかった。ここからはロスアンゼルス市街が一望できる。ロスアンゼルス市は北海道より広域だから全部は見えない。東京タワーから見えるくらいの眺望である。東側の巨大なビルが、かの有名なロス市警である。こんないいところが無料である。しかし、どうして誰もいなかったのだろうか？ 不思議。豪華なロビーには歴代市長の肖像画が掲示されていた。ここでトイレを拝借。

**アメリカ版100円ショップ** 本日はカミさんの体力を考え、これまでとし、ホテルに戻ることにした。途中コリアン地区ではあるが、既にヒスパニック化している地区でWest lake MacArthur Park駅の「99セントストア」で買い物し、ここから500mしかないホテルまで、タクシーで5ドル。チャーリーというコリアンの運転手は、いつでも電話してくれといったが、メーターを倒さなかったので、ウサンクサイ奴と思った。カミさんは信用していた。チャーリーを使えば、白タクにだまされることもなかったなあ、あとで悔やむことになる。



---

4月16日水曜日 第4日目

### ロスアンゼルスからラスベガスへ移動

**人、言葉、メタボ** 朝4時に目が覚めた。ロスアンゼルスについてからの感想は、まずルンペンというかホームレスというか真っ黒な上下の服を着た大きな太った真っ黒な人間があちこちに屯して、通行人を睨みつけたり、大きな声をあげているので、ここはジャングルか！といいたくなる。また、ヒスパニック系の太った若者たちが朝から深夜まで近所を大きな声でしゃべりながら徘徊している。まともな仕事がないようだ。とにかく、みな肥満。ジャンクフードが原因と思うけどどうだか...

町全体の人が自分の体をもてあまして、ユスラユスラ歩いているような感じである。日本でメタボ 85センチ以上なんて基準は、考え直したほうがいいのではなかろうか。アメリカ人というのは漠然と白人の国かと思っていたが、今は違うようだ。ロスで出会った白人は5%程度、言葉はスペイン語が普通語で、バスの運転手に英語で質問するとスペイン語が返ってくるようなところだった。もちろん、バス Map も英語とスペイン語の説明がついている。

**公共サービス** エトランゼには冷たい。日本はサービス过剩だと思うが、ロスはその反対、外国人へのサービスは全くない。市民さへわかればそれでいいということだろう。だから私のように団体ツアーでない旅人は大変だ。市民には市民の常識があって、どこを押さえれば必要な情報がでるか知っているが、市民以外はどうていわからない。したがって、数日間苦労しなければ、毎日道に迷うことになる。とにかくロスは広大で方角の見当をつける顕著なものがなく、しばしば立ち往生した。さらに、サンフランシスコとロスは同じカリフォルニア州でありながら、別の国のように交通状況が違う。料金も違う。アメリカ合衆国は団体ツアーがいい。ヨーロッパで、かなり通じた英語がロスでは通じないのである。ロスではアクセントを間違えたら通じない。スペルを書いても読めない者が多い。しかし、アメリカ英語をしゃべることはできる。ヨーロッパ人は日本人の発音をスペルで聞いてくれるのだろう。アメリカ英語の発音が下手同士だと通じるのである？(6月25日旭川から利尻島まで同行したフランス人との英会話はスムーズだったから、ロスの英語は東北弁とか鹿児島弁と同じようなものだろう)

停留所や駅の案内、当初は案内がないので、不親切だなあと感じていたら、ちゃんとあるのである。市民は知っているがエトランゼにはそれがどこに表示されているのかを知らない。それを知ったときは町を離れるときか離れた後で、活用の機会がなく、えらく不親切なサービスと感じるのだと思う。

**シニアへの接し方** 日本人は冷たい、バスや電車で日本にも優先席があるが、ロスでは市民全員がシニアに対して親切である。特にバスでは市民のそれは徹底して感心した。料金体系はわからないが、1ドル25セントが25セントになったり50セントになったりする。こうした料金体系は都市により違う。しかしながら、東京都のように都民だけにシニアパスを発行するようなケチな国ではないようだ。

**医療保険の問題** こんなデブばかりでは、全員成人病だろうから到底医療保険は成立しないと思う。行き倒れのような人をたくさん目撃したが、誰ひとり見向きもしない。しかし、ギターを弾いて物乞いする人には気前よく喜捨しているので、彼らの精神構造は理解できない。努力しない者にはハナもひっかけないのかなあ！

思いやり、カミさんは病人であるが、健康のように見えるし、普通に生活できるので、私はつい無理させてしまう。まことに申し訳なく思うが、すぐにそれを忘れてしまう。今度の旅行日程も、自分中

心に計画しカミさんの健康をまったく考えていなかった。と反省したが...

**ロス**の宿 Comfort Inn は、カナダを本拠地とする世界的なエコノミーチェーンの旅館ホテルである。いたるところにあるが、フランチャイズ方式で、直接経営ではないようだ。このホテルも「Comfort Inn Los Angeles City Center」という大層な名前である。2人2 Queens 朝食つき税込み 107ドルと安い。ただし、14%~18%の税金が上乗せになる。2 Queens というのはクイーンタイプのダブルベッドが2台ある室という表示で4人まで宿泊できる。3人、4人となると少し高くなるシステムである。スタッフは全員ヒスパニック、宿泊する人もほとんどスペイン語圏の人ばかり。3階建てで90室ある。上等な室ではないが清潔で気持ちいい。

**ラスベガスへ** 本日、16日は08:40チェックアウト、これからラスベガスへ行き3泊する予定なので、バッグはこのホテルに預けた。預かり札をくれた。携行したのは着替えだけ。グレイハウンド・バス・ターミナル11:00発を予約していたが、10:00発に間に合うので、繰り上げてもらった。途中、リトル・トウキョー・ショッピングセンターとユニオン駅で数人乗せ乗客は29人。トイレ休憩と昼食タイムを除きノンストップの予定。11:55停車、砂漠のど真ん中、僅かに草が生えているだけ。12:20から13:00まで昼食タイム、中華いため1人分を2人で分けた。とにかく量が多いのである。ラスベガスに住んでいる日本人のオバちゃん2人と知り合いになる。日本語が聞こえたので、カミさんが「日本の方ですか」と尋ねたら、あちらも日本人が珍しかったのか、ラスベガスの話をいろいろしてくれた。すばらしい環境の郊外の山手に住んでいるのだそうだ。この人が Imperial Palace Hotel までマイカーで送ってあげるといっているので、好意に甘えることにした。お互いに名乗りあって、車の持主がスミコさんと友人のミチコさん、ミチコさんとカミさんは同じ名前で同年齢、話が弾んでいた。スミコさんは「何か困ったことがあったら、いつでも電話をください」といい、二人のアドレスのメモを書くなど、親切な人たちだった。

**ラスベガスの宿** 15:55バス終点到着、スミコさんのNISSAN車に乗せてもらって17:00ホテル着。752号室のキーカードを渡された。フロントもカジノの一角にある。境はない。グランドフロアは全部カジノである。なるほど、お客は宿泊が目的ではなく、カジノのためにベッドが必要なだけである。満員ではなく適当にお客が椅子についたり歩いたりしている。エレベーターで7階に上がったが、とにかく広すぎて廊下は迷路のようで、いったりきたりしながら、やっとわが部屋に入ることができた。2650室あるそうだ。

明朝早くグランドキャニオン・ツアーに参加する予約をしていたが、ツアー会社がメールで連絡してきた待合場所がはっきりしない。ホテルが大きすぎて、場所を特定できない。そのメールを見せながら5人に聞いたが、すっきりせず不安。

**道行やギクシャクするばかりなり** しばらくベッドに転がり一息いれた。夜になったので、夜景とショーを見ようとホテルの前に出た。この道は通称ストリップ、正式にはラスベガス・ブルーバードという大通りで、多くのホテルが立ち並んでいる通りである。相当な人ごみである。カミさんがダブルデッカーのバスに乗りたいたいというので停留所を探すが、さっぱりわからない。そのうち、もういい、レストランに入りたいという。シーザーズという大きなホテルのレストランの料理にはまいった。ヌードルを注文したら、中華ラーメンもどきとパン2個、大皿のモヤシと葉っぱの大盛りがでてきた。カミさんが「このモヤシはナマみたい」と言いながら口に入れたが、やはりナマだと吐き出した。一流ホテルのレストランでこんな料理を出すのかと不愉快。二人でチップ込み45ドル。カミさんのご機嫌はますます斜め。ホテルに帰る。

\* ストリップとは細長い切片というのが語源で、細長い土地という意味がある。ちなみに道は、ストリップのほか、ストリート、アベニュー、ヂストリクト、ブルーバードなどがあるようだ。日本のスト

リップ劇場とのかかわりについては、アイトントノー。

---

4月17日 木曜日

グランドキャニオン・サウスリム・バス日帰りツアー

地の果てのグランドキャニオン春の旅

Tour of The Grand Canyon of the spring was an end of the world.

**国際人ミサコさん** 目覚時計を05:30にセットしていたが、その15分前にカミさんから起こされた。05:45に電話のベルが鳴り、日本語で「迎えに行きます」という石塚と名乗る人物の電話があった。ホテルのバス待合室に日本人男性がいて、待合室前に駐車している大型バスに案内した。06:00若い女性が乗車し発車。ラスベガス空港待合室に案内された。そのビジョン航空カウンターでチェックインし、カードで290ドルを支払った。一人が145ドルである。同じインペリアルパレスから乗車した若い女性は「ミサコ」さんで、彼女は89ドルで参加した。早く予約すると正規運賃で、期日が迫るとバーゲンして売ららしい。この関係はよく理解できたが、次に活用できるチャンスがあるかどうかは疑問である。ミサコさんは中国語、英語、日本語が堪能で、昨日、飛行機とホテルがパックの個人ツアーでロスからベガスにきたのだそうだ。先日大学の修士課程を卒業したので、休暇を旅行しているのだそうである。この日英語がわからない私たちは彼女からたいへん助けられた。

**フーバーダム** ビジョン航空は、空からの観光や2泊3日のバス・ツアーなどを企画しているが、航空機による観光は白人ばかりだった。空からの観光はテレビで見たことがあり、かなりスリリングだったので敬遠した。08:00バス発車、日本語の日程表やガイドを渡されたが、ドライバー兼ガイドは英語しか話さない。高速道路を北西に山岳地帯へと入り、08:40フーバーダム入り口でチェックされ、その後展望台でカメラ下車。

フーバー・ダムの恩恵、コロラド川を堰きとめたフーバーダムの完成により、水と電力を利用してラスベガスは発展したのだそうだ。1935年完成、ネバダ、カリフォルニア、アリゾナの3州約2,500万人に飲料水と工業用水を提供している。なお、高速道路では、カリフォルニア州とネバダ州との境に国境のような検問所がある。

**グランドキャニオン** ネバダとはスペイン語で「雪をかぶったところ」であり、ラスベガスとは同じく「牧草地」という意味だそうだ。ラスベガスはネバダ州クラーク郡に属し、人口182万人。主要ホテルは50、客室数13万3000だから、ホテルの平均室数は2,500である。もちろんカジノの街ではあるが、年間の観光客数は約4,000万人で、世界中からエンターテインメントやショッピングに集中するのである。60を超える教会は24時間営業で結婚式をこなし、また法廷では離婚も簡単に成立するのである。フーバーダムから先は片側1車線となり、高度も8,000フィートとなる。14:00停車、第1の展望所に到着、20分間だけ。眺望があまりにも大きすぎ感動が起こらない。ここが直立した崖の上で、直下は1,000m下の谷だと書いてあっても全く実感が湧かないのである。恐ろしくも何ともない。コロラド川の対岸の高さは、こちら側と同じ高さで全く凹凸がなく横一直線に見える。太陽が高い位置にあり、陰影が少なく、物足りない光景だった。

50年前ハワイ島のキラウエア火山の火口を眺めたときの感じもこんなものだった。余りにも巨大すぎて、ネジが緩んだアタマの神経が対応しきれないらしい。

次のポイントは**ブライト・エンゼル・ロッジ**。ここは15:30まで。日が傾いて陰影が深まって溪谷のすごさが少しわかってきた。しかし、強烈な印象は残っていない。15時間のツアーで約1時間半の展望、世界3大自然公園を訪れるのは大変だ。

**米国人の善意に感謝** 17:00 トイレ休憩、発車後財布がわりの名刺入れがないことに気がついた。たいしたお金は入れていなかったが、お世話になった人たちの電話番号やメールアドレスを入れていたので、困ったなどは考えていた。「ミサコ」さんが『ドライバーがインペリアルパレスから参加した3人の人に用事がある』といているという。名刺入れにホテルのキーカードを入れていたので、トイレ休憩したショップの人がドライバーに託したのであった。水を買ったときカウンターに置き忘れたのである。かくして、アメリカ人の善意に感謝したのである。ドライバーにはお礼を言ったが、届けた人にお礼を伝えてくれと英語で言えず、それが心残りである。21:00 ホテル到着。今日は心が温まるいい日だった。

**ホテル・カジノの偵察** 疲れたカミさんを残し、ホテル内を1時間半かけて偵察したが、巨大ビルは迷路のようで様子はわからなかった。とにかく、エレベーターが9箇所 23台にエスカレーター、階段がありパブリック部とホテル部が複雑なのだ。

---

#### 4月18日 金曜日 ラスベガス観光の一日

**初メール** 08:00 昨日のグランドキャニオンの余韻を引きずりながら起床、すぐに4階のビジネスセンターに行くと、東洋人の若いビジネスマンが先着してニッコリ挨拶した。挨拶を返すと「自分はビジネスで来たコリアンです。あなたはどちらから来ましたか？」と丁寧なわかりやすい英語を話した。スタッフの黒人女性は、3ドルで10分間使用できますといいながら、ディスプレイを日本語表示できるようにしてくれた。この場合、タイプは英文である。日本語はローマ字でタイプすることになる。起動し、インターネット・エクスプレスを立ち上げ、ログインすると自分の世界になるのである。娘たちに英文で簡単に「今ラスベガスにいる。昨日はグランドキャニオンに行った。元気です。また、メールします」とだけ送信、3ドルであった。(後日譚:長女いわく「変な英語のメールが入っていた」。それで、私は「開いたらダメ、ウイルスが感染する」と言った。しかし、後でそれは私が書いたものだと気がついた。間抜けな会話だったのだ。)  
部屋に戻って、パン、牛乳、ヨーグルト、オレンジ、アップルの朝食。

**モノレールのデイパス** 本日はラスベガスの主要なカジノを観察する予定でホテルを出た。日本から持参したガイドブックによれば、トロリーバスに乗り適宜乗ったり降りたりできるデイパスがお得であると書いてあったので、あちこち歩くが路上に電線はなく、廃止し撤去したのか元々なかったのかは不明であるが、見当たらない。カミさんは歩き疲れてくる。じゃモノレールと切り替えたのが間違いのもと、モノレールは裏通りを走るのである。すべてがこの調子で何事も順調に運ばない毎日である。(これも後の祭り、5月16日、インターネットでサーチしていたら、ラスベガスのトロリーバスは路上に張った電線によって走る車ではなく、ガソリンエンジンで走るレトロバスのこととわかった。ハナから電気駆動だと決め付けていた私が浅はかだったのだ。)

**ストラトスフェアー・タワー** とにかく、北の終点 SAHARA 駅で降り、高さ1,149フィート、展望階は112階で909フィートのストラトスフェアー・タワー展望台へ行く事に合意した。巨大な塔は近いようでも遠い。また2キロ歩いた。この塔はカジノの一部である。展望台エレベーターのチケット売場やエレベーターが、どこにあるのか案内板はないから、それらしき人の後ろをついていくしかない。とにかくグルグル回ってようやくエレベーターホールに行き着いた。シニア料金は17ドル。塔からの展望、タワー・ガイドによれば、103階(レベル103、高さ785ft)は「雲のなかの結婚チャペル」、104階は会議場と宴会場、106,107階は世界で一番高いレストラン、108階はインドアの展望台、109階は「金切り声を上げる遊戯施設2基」と戸外展望台、その上方は塔先端から落下する遊戯

施設 Big Shot となっている。一般の入場者はインドアの展望室までエレベーターで上がる。そこから階段で戸外展望台まで上る。

すばらしい展望、ラスベガスというところは山に近いところかと思っていたら大平野のど真ん中だった。砂漠だったそうだが、フーバーダムから引いた水で緑豊かな町並みになっている。全国からの人口流入はとどまることを知らず、住宅の建設ラッシュが続いていた。カジノはリニューアルの最中で、1950年代の建設されたダウンタウンのホテルは更新中である。現在の中心地区はダウンタウンから南の方角になり、巨大ホテルが林立しているがストリップに面しているホテルは、25程度である。わがインペリアルパレスは偶然にも最初から現在位置に建設したため、地の利を得ているらしいが、ここではもっとも古ぼけたカジノらしい。ラスベガス国際空港はこの地区の一角にある。

インドア展望台で外を眺めていたら、いきなり叫び声が響いたので何事かと見ると、塔の外を椅子が回り、人が座っているのである。こちらも思わず身がすくむ。これは「Insanity 狂気」という施設で、もうひとつは「X-Stream 空中お散歩ボート」とでも名前をつけたいもの、塔の外へボートが突き出すというもの。こうしたスリルを味わいたい少年少女が多いようである。

**buffet** 昼近くまでここでノンビリ、また歩いてモノレールがある SAHARA ホテルでbuffetに入った。buffetというのはバイキング式のレストランのこと。どのホテルにもある大食堂である。料金は 12.85 ドル。どこもこんな価格だからお客は多い。こういうレストランだと現物を見て食べることができるから安心だし美味しい。(ビュッフェと同じ意味と思う)

**カジノ・ホテル巡回** ウォークイン・カジノ、モノレールで Paris Las Vegas へ。入口はメイン・カジノ、誰でも入れる。ほとんどのホテルでも、通りから直カジノであり、中にはカジノと大通りに境の扉さえないとこもあり、そこではセミヌードのダンサーが踊っていた。100m ほど奥へ進むと、そこはフランスのパリである。Le Boulevard という通りなので。でも、ここは仮想の街であり、ビルの中に仮想のパリを演出しているのである。凱旋門、コンコルド広場、エッフェル塔があり、青空に雲、大空の鳥さえいる。よく見ないと人工の空とはわからない。両側にフランス語表示の店やレストランが並んでいて、道には人が流れている。この道は隣の BALLY'S まで数百メートルも続いているように感じた。「シーザー」はローマの皇帝の館を想定しているようで、いたるところに模倣した彫像や絵画を展示している。カジノより宿泊客のステイタスをくすぐる演出のような気がした。ローマにも残っていない旧きよき時代のローマにいるような気分にしてくれる。プールでは大勢の人が泳いでいた。週末で人通りが激しく、暑いうえ人酔いするほど。いったんホテルに帰って休む。

外を歩いてみた印象では、トヨタのプリウスをよく見かけた。ガソリンはリッターあたり 100 円。ラスベガスは 24 時間休まないの、雇用は 3 交代、すなわち、3 倍の人手が必要らしい。と聞いたが、朝はさすがに、カジノで遊んでいる人は少なかった。

**満月の噴水ショー** 夕方になってカミさんも元気になったので、まずモノレールで一巡し『VENIZS』へ。ベニスの商館をイメージしているカジノ。大運河(Great Canal)をイメージした細長い曲がったプールがあり、そこではゴンドラに客を乗せ、ゴンドリーナが美声を聞かせる趣向である。ゴンドラの船体下部後部には小さいスクリーががついていた。バッテリー駆動らしい。当然両岸はイタリレストランやブランドショップの街である。ここは超満員であった。カミさんの狙いは大噴水ショーである。「Bellagio」のストリップに面した側は、幅 200 メートル以上奥行き 100 メートル以上もある人造の大噴水場である。ここで、夜間 30 分おきにクラシック音楽にあわせた大噴水ショーが行われるのである。周りはひと目みようとな人が集まってきて写真撮影もままならず、2 度目のショーでようやく満足した。すっかり暗くなった中天に満月がかかり、派手なネオンサインと記念すべき写真が撮れた。

カミさんも大満足でホテルの小部屋へ。私は足がかなり疲れてきたが、まだ大丈夫だ。

4月19日 土曜日

ラスベガスからロスアンゼルスへ戻る

久しぶりに熟睡、09:30 朝食 Imperial Palace のbuffet、11.50ドル

10:20 チェックアウト、タクシーでグレイハウンド・バス・ディーポへ。20ドル。

12:05 バス発車、砂漠へ。16:20 車が混み始める。住宅地で緑が濃い、全部植林でフーバーダムからの給水とのこと。18:00 ユニオン駅に到着、イエローキャブでコンフォート・インに再チェックイン。気温が華氏73度(23℃)と涼しい。どうやら異常高温は正常に戻ったらしい。明日はサンフランシスコへ飛ぶので、朝8時にイエローキャブを呼ぶようにフロントの男性に依頼した。預けた荷物を受けだし、梱包した。目覚ましを05:30にセットしたが、寝付けずまいった。バスの中でたっぷり眠ったからだろう。本日はトピックなし。

春の夜は夢ばかり旅の空

I had a dream on the trip of the spring every night.

観光のロスアンゼルスは広すぎて地図をも読めず日々迷いけり

I am a loss look for a sight seeing spot in the map of Los Angeles be too wide every day.

**衆愚国家の日本が見えた** 帰国後さるお方からご指摘いただいたことから、民主主義の国といわれるアメリカ合衆国のナマの姿を考え、日本のことも考えてみた。わが国では、朝晩、世界情勢たとえば、ブッシュ、ヒラリーとオバマ、イスラエル問題、ミャンマー問題などホットなことが新聞やテレビで報道される。ロスアンゼルスでは、ほとんど取り上げられていない。読者のニーズがないということだろう。テレビにしてもすごい数のチャンネルのなかでニュースを流す局は3つくらいしかないし、その他の番組は日本と同様にくだらない番組を24時間流している。目立つのは視聴者が参加する賞金獲得のゲームである。

日本は島国なのに、あるいは島国なるがゆえに、他の国のことが必要以上に気になっているようだし、大陸の人は他人のことなどどうでもいいということだろうか。力がなくせに、口だけ達者な島国が、隣近所はおろか地球の果ての人権問題まで嘴を突っ込んでいようにしか見えない。それに比べ、この国は、いつもは無関心だが、怒ったら他人がどう思おうと、己の欲するままに力任せに暴力を行使するように見える。

合衆国は、倫理で秩序を保っていない。法と力が必要であるとしている。単一民族はお上からいただいた法と部落的もやいからの倫理で秩序を維持しようとする。罰より教育をという国である。そこまではいいが、なぜ他人の行動にやたら嘴を入れるのだろうか。それは、ある意味煽動である。だから、日本国民は世界情勢に明るい。アメリカでは煽動しないから関心が薄いような気がする。このようにマスコミの性格が違うからではないかと思う。ワシントンや世界の政治を報道しても、ロスでは新聞が売れないのだろう。これをもって、国民一般のレベルが低いなどと考えるはいけない。

それぞれに国情が違うのである。アメリカでは医療保険問題の解決への取り組みが活発ではない。しかし、シニアに親切な国民が多い。日本では何もかも政府の所為にして、規制強化を促し、国民自らが自由を奪われることを望んでいる。そんな国は自由主義国でもなければ民主主義の国じゃない、正真正銘の衆愚国家である。自主規制の国では観光地の危険箇所の表示さえないところが多い。ここではどちらがいいかは言わないが、それぞれが選択した制度だから、他人があれこ

れ言うことではないと言いたい。

アメリカ国民のナマの姿を垣間見る機会もなかったが、他人の生活を気にするより、自分の生活をエンジョイすることを志向しているような気がした。日本の奥様方は他人がどう思うかが最大の関心事らしいけど...だからデブだろうが激ヤセだろうが、評論しないのであろう。しかし、シニアを大事にし、喜捨をする。これは美德、日本人も見習ってもらいたい。

街の中心部は絶えず清掃してキレイだが、場末に行くと紙切れが舞い、汚水が滲み、実に不潔だ。この点日本はとりたてて磨かれた道はないが清潔である。上野の青いテント村も不潔ではない。

私は中国のトイレが汚いという話を聞いているので、行きたいと思ったことはないが、キレイになればとは言わない。内政干渉はしたくない。私の髪の毛は少なくなった、この事実を他人から指摘されると不愉快である。余計なお世話である。ミャンマーの災害に人道派遣を申し出るのは結構だが、受け入れないからと非難するのは余計なことだ。無理に押しかけることはなからう。ケンカを売るようなものだ。常日頃軍政を非難しておいて、人道援助しようと言えば、非常事態に乗じて国民を煽動してくるに違いないと受け止め、申し出を断るのが当然だと思う。

---

4月20日 日曜日

ロスからサンフランシスコへ移動

朝早くからカミさんがゴソゴソしはじめたので、私も起きてしまった。ここのサンシャイン・ブレイクファーストという朝飯(夏時間 06:30 から)を食べて、することもないので、フロントの青年に「昨夜イエローキャブを頼んでいるが、7時半にきてくれるよう電話してくれ」と言うと、自分はグリーンキャブしか知らないと言って、電話する様子はなかった。荷物を持ってフロントに行き、チェックアウトしたが、最初のチェックインのときにいたオバちゃんが出たので、タクシーを頼むとその場で電話した。そして、ホワイト・タクシーがやってきた。

白タクだ 年式は旧いが立派な高級車である。さっさとバッグを積むので、これはグリーンキャブじゃないが、これでいいんだろうと乗り込んだのである。ドライバーは太ったメキシカンである。ガソリンスタンドに寄りガソリンを入れ、マニーマニーと右手の親指と人差指、中指を摺り合わせる。60ドルだという。着いてから渡すつもりだったが、しつこいので、ガソリン代にするのかと思いながら50ドル札と20ドル札を渡すとサンキューサンキューといい釣りをくれない。釣りよこせ、と英語で言えないのだ。仕方ないかと諦めた。発車したので空港へ行くのかと思ったら、なんと別のホテルの前で停車し客引きするではないか。おかしいなと思ったが、英語をうまくしゃべることができないし、お金は払ってしまったし、とうとう、白人2名が乗ってきた。後ろのトランクに荷物が入りきらないので、カミさんの横に一個置かし、私は後部座席中央で窮屈だし、腹が立つ、とうとう早く空港へ行けと怒鳴ったが、へのツッパリにもならない。まあ、間違いなく空港には着いた。降りるとき、白人の若者に、私が70ドル払っているから君たちはお金を払うなと言いつつ残したが、通じたかどうか。

それにしても手が込んでいて、こういう手合いに引っかけたら、どうしようもないと思う。フロントと白タクが結託していたと思う。また、到着前にお金は払うべきではなかった。しかし、あのときお金を払わなかったら放り出されたかも知れず、ものは考えようで、こうした話題を提供してくれたのだから、20ドルばかりの取材費だったと思えば高くはないとしたのである。あちこち連れ回し法外な料金を請求する悪質な白タクがあると聞いている。そのときは猛烈に腹が立ったが、2,3日たったら、子悪党にごまかされたただけだと腹の虫が治まった。

**ザラ紙の搭乗券** アメリカン航空カウンターはさして混んではないが、搭乗券の発券に、てこずっている人も多く、私もそうであり、係りのスタッフに手伝ってもらった。薄っぺらなザラ紙の搭乗券でビックリした。しかし、何も厚紙でなければならぬ理由はない。E チケットのカウンターは、ディスプレイが6台ずつ並んでひとつの島となっていて、搭乗券と荷札が別のところから同時に発券するシステム、まず搭乗券の発券をすませ、次に荷札を発券するカウンターに手荷物を持参し預かり証を受け取る仕組みである。

**女は検査や取り締まりに最適** ここまではスムーズで話題を提供できなかったが、ボディチェックに引っかかったのである。腰のベルトを外し、靴を脱いで透視検査を受けるとき、ウエストバッグの中にパスポートと搭乗券を入れたまま、その検査機械の台に乗せてしまったのである。だからボディチェックの際の身分証明ができない、となると出発ゲートに入れられないということになったのである。その係官は女性、そこにあると言って隣のレーンにあるウエストバッグを指差しても全くとりあってくれない。たまりかねて、そのレーンの男性のスタッフが私にバッグを渡してくれた。それで、私は彼女の目の前で、そこからパスポートを取り出して彼女に見せて、通り抜けることができたのである。何の反応も示さない無表情な金髪だった。実に女はどしがたい。マニュアルどおりにしか動かないのである。それにしても、どうして私はこう間抜けなことを仕出かすのかわからない。こうした要領は旅の心得として、ガイドブックに書いておくべきではないか。それとも神さまは私の旅の話の種を提供しているということだろうか。なんだか、私のアタマは毎日朝晩賢く成長しているようだ。それと引き換えに身体能力は日々減退しているようだ。

出発ゲートの47Aに行くと、42Bゲートに変更になったとのこと。座席指定がない搭乗券だったので、請求すると、待ってくれという。搭乗手続きが始まって何の呼び出しがないので、カミさんがカウンターで確認すると、すぐに印刷した紙をくれた。いい加減な連中である。

**10:05 テイクオフ,11:20 サンフランシスコ国際空港に着陸** ロスには8つも空港があるが、ここは1つだ。空港からダウンタウンへはいろいろな順路があるが、スーパーシャトルバンを選んだ。@16.00ドル、二人で32ドル、チップを5ドル払った。

**サンフランシスコの宿** グラント・プラザ・ホテルはチャイナタウンの入口にある中国人経営の小さなホテルで、とても便利な場所にあった。13:00に到着したが、フロントには若い女の子がいてニコニコしながら、チェックインは2時半からですけどと言いながら部屋の鍵を渡してくれた。この人の英語はわかりやすく、話がかなり通じた。昼食は2ブロックのところにあるマル・寿司にした。和食の献立がいろいろあり、親子丼を注文した。日本の味と微妙に違うけどまあまあ美味しかった。日本人経営の店のようで、ウエイトレスの若い女の子も、後で出てきたオバちゃんも「オマタセシマシタ」「アリガトウゴザイマシタ」と言った。味噌汁のお椀に中華で使うレンゲがついていたのが滑稽だった。

**寒い寒い坂の町** いったんホテルにもどり、着込んで外出、とても寒く手袋がほしい。サンフランシスコは坂の町である。坂道を階段状に改造して登り降りしたいほどの急坂である。人々はケーブルカーで丘のてっぺんまで登り、そこから家路についたのだろう。グラント通りを下り、マーケット通りに出て、「F」ラインのチンチン電車に乗り終点から終点まで窓の外を眺めようということにした。これは前にオーストラリアやカナダで個人旅行したとき実行して、気に入っているパターンである。

**フィッシャーマンズ・ワーフ** まずマーケット通りを東へ、シニアは50セントで乗換券をくれる。東行きに乗りフェリービルで海岸通りに出て北上し、海岸なりに西へ行くと終点のフィッシャーマンズ・ワーフである。日曜ということだろうか、すごい人出で賑わっていた。ワーフは埠頭という意味で、



道路も木の栈橋風である。露天ではないが露天風の食べ物屋がどこまでも続いていた。39 番埠頭はトドの飼育場となっていて、無料で見学できる。100 頭足らずのトドが巨体を浮体に寝て吼えている。あたりは生臭い。しばらく様子を眺めて、今度は逆方向の電車に乗った。終点はカストロ、かってヒッピーが発生したところ、現在はゲイの町として有名だ。こんな調子で一巡し、中心地のパウエル通りのウエストフィールド・ショッピングセンター地下の食堂でピザを食べてホテルに帰った。フロントには愛想ゼロのオバちゃんがいた。

#### 4月21日 月曜日 サンフランシスコ2日目

これやこの往くも帰るもケーブルカー

This is a cable cars, the going and the returns.

本日はインフォメーションでバス Map を手に入れるため、まず、町の中心地ユニオン・スクエアのチケットコーナーに行ったが、まだ開いていなかったの、東京の銀座通りみたいなマーケット通りで、ケーブルカーの発着点であるパウエル駅地下1階のビジターズ・インフォメーションに行った。相談デスクでは東洋系の年配のおばさんが相談にのってくれた。Bus Map はリーフレットに記載されていること、シニアは月10ドルのパスが買えるのですよと教えてくれた。隣のデスクで各種のチケットを売っている。すっかりいい話を聞いたつもりで、マンスリーパスを買いたいと黒人のオバサンに言うと、そんなものはないと二べない返事、よく聞いてみると、地元のシニアを対象に前売りするのだそうで、今日買って今日から有効というものではないのだ。それにデイパスにはシニア割引はない。なんだかソッとした気持ちになった。3日有効の3day pass は18ドル、2人で36ドルと安くはない。しかし、ケーブルカーは一度で5ドルだから3日間で4回乗れば元が取れると勘定したのである。なお、バスや電車の料金を料金箱にいれると、運転手は必ず乗換券をくれる。大きくその日の数字が印刷されている。その日は何回でもそれを使って乗れるのであったが、乗換券は違う路線への連絡のときのみ有効かと解釈して、同一路線で帰るときは、「アィム シニア！」と叫んで50セントずつ支払ったのであった。笑い話である。

**ケーブルカー** ケーブルカーといえば、サンフランシスコの代名詞でもある。ケーブルカーは3路線あり、南北に2本、東西に1本、昔はこれで十分だったんだろうと思う。わが国でも、昔から栄えた天然の良港である小樽、横浜、神戸、長崎は皆坂の町である。海が深いところは陸地も平坦ではないのである。サンフランシスコはフォード社発祥の地で自動車のオートメーション工場としても知られている。町が発展して山まで、そして山を越えるところに住宅地が広がると、自家用車の買えない階層の通勤対策もあってケーブルカーが設置されたのではないかと思う。今でもほんとうに便利である。サンフランシスコのダウントウンはこじんまりして、歩いて十分用を足せるほどだが、急坂の登りは息が切れる。

観光客の場合は乗ることが目的で、100メートル乗っても5ドルであるが、いつでも満員である。速さは飛び乗り飛び降りできる程度、しかし、ただ乗りはできない、車掌がいて、乗ったらすぐにチェックされる。車の外側が1等席でここから席が埋まる。外側に乗りたい人は次のケーブルカーに乗る列に並ぶのである。ところが外側の席に座れても、その外側に立つ人がいるから、喜ぶのは早いのである。道路の地下を走るケーブルに車体を繋いだり放したりして動く仕組みだ。スキー場のリフトのケーブルが地下にある仕掛けである。朝から深夜まで、道路の下からはゴウゴウという音が出ている。普通の坂の町では、道路を緩やかな勾配にするため道路は曲がりくねって迂回するものだが、サンフランシスコでは道路は厳密に強情に東西南北に直線的に走っているのである。ひどい道は勾配が30度くらいはある。自転車は使えない町だ。こういう坂にもマイカーが上手に駐車している。道路そのものの左右の高さは同じだ。したがって、ケーブルカーの停留所は、ケーブルカ

ーが横切る交差点の中央である。乗客はそこで乗り降りをするのである。こちらは慣れないから、おっかなびっくりで前後左右をキョロキョロみながら下車する。サンフランシスコの道路はロスアンゼルスに比較すると極端に幅が狭い。といっても日本の道路よりは広い。こういう道の中央に複線のケーブルカーが走っているのである。ケーブルカーの運転手は皆大男、車内の中央付近にいて、左右の手に車輪のブレーキとクラッチの大きな鉄の棒を握って立っている。大男なので、頭が天井につかえるから首を曲げている。昔の人は小さかったのかなと思ったりした。クラッチはケーブルを挟んだり緩めたりして動力をコントロールし、車輪のハンドブレーキで停車させる。大きな声と大きな音をたてる。なおブレーキは車体の後部にもあり車掌が操作する。すべて人力だから力持ちじゃないとできない。

終点では、これまた人力でケーブルカーの向きを 180 度変える。運転手、車掌ともう一人で押し回すのである。とにかく楽しい乗り物である。昼間だと長蛇の列ができていて、5 分間隔ぐらいで動いているが、ダンゴになったり、なかなかこなかったりする。パウエル駅から北の終点、フィッシャーマンズ・ワーフまで山を越えて行く。

**コーヒーから連想** お昼になったので、スターバックコーヒーでサンドイッチのランチ。東京でも最近スターバックコーヒーが目立つが、ここではどこの街角でも見かける。コーヒーはアメリカンのスモールを注文したが、そのスモールの大きいこと、500cc 以上はある。隣のおじさんのは 1 リットル以上はあった。こんなに水分をとったら、トイレが近くなると思う。日本に比べトイレ、特に公衆トイレがない。ヨーロッパでもそうだったが、膀胱がかなり大きいのではないかと思う。つい、普通の人と違う方向でものを考えてしまう。コーヒーから膀胱の大きさを推量する話である。カミさんには通じなかった。お通じはなかなかだがトイレは近い人には、こうした話は通じない。

**金門橋** サンフランシスコの玄関は**ゴールデン・ゲイト・ブリッジ**である。私もいつかは船でここをくぐりたいと思っていたが、こうして見物することができて嬉しかった。後輩たちは練習船で世界一周するときここをくぐるのだろう。霧のサンフランシスコともいわれ、365 日霧笛が聞こえる。今日もボーという音が聞こえるが、北海道の襟裳岬の霧笛のように腹の底にしみいるような音ではなかった。それより軽い霧笛だった。太平洋から入港するとき、右側に暗礁があるのだろう。ワーフから 28 番のバスが出るフォート・メソンまで 2 キロ歩いた。バスに乗り橋の袂のフォート・ポイントで降りる。記念碑の一つに、瀬戸大橋と姉妹橋になったとあった。この吊橋の長さは 2,737 メートル、橋脚の最大高さ 227 メートルである。自転車や歩行で渡ることもできる。潮風を受けて心地よいこの展望台からは**アル・カボネ**が収容されたことがある監獄島**アルカトラズ島**が目の前に見える。サンフランシスコを想う名曲がある。戦地に赴く軍艦は、**ゴールデン・ゲイト・ブリッジ**をくぐる時、答舷礼をしつつ“I left my heart in San Francisco”を合唱するという。

愚作 2 句。

艦上に水兵たちが整列し金門橋に今さしかかる  
When a Navy ship passes The Golden Gate Bridge in San Francisco, the sailors stand in line on the deck.

「想いでサンフランシスコ」の歌声が金門橋に湧き上がりけり  
A singing voice “I left my heart in San Francisco” welled up to The Golden Gate Bridge.

「I left my heart in San Francisco」の歌詞

The loveliness of Paris Seems somehow sadly gay  
The glory that was Rome Is of another day  
I've been terribly alone And forgotten in Manhattan

I'm going home to my city by the day

I left my heart in San Francisco High on a hill, it calls to me. To be where little cable cars Climb halfway to the stars!

The morning fog may chill the air I don't care!

My love waits there in San Francisco

Above the blue and windy sea

When I come home to you, San Francisco, Your golden sun will shine for me!

絶景を十分堪能したので、西海岸を南下するコースで帰ることにした。28番バスでゴールデンゲイト公園へ。日本茶亭に行くつもりだったが、何キロも歩かなければならないようなのでショートカット、43番、38番バスに乗り継いでホテルへ戻った。ロスと大違いで迷うことはない。

**カモにされた話** 夕方、ヨセミテ公園までのバスを予約している会社の女性へ電話で確認をしたら、「申し訳ないが、人が集まらずツアーキャンセルします。別の会社のツアーがありますので、そこを紹介しましょうか。ただし、別に40ドルかかります。」と言う。一瞬「はめられた」と感じた。最初から、そうするつもりだったに違いない。しかし、ヨセミテのホテルは予約しているし、お願いせざるを得ない。つまり、もともとツアーなどやっていない会社で、他の会社のツアーへ斡旋して利鞘を稼いでいる連中なのである。英語が堪能であれば自分でツアー会社に電話して解決できるが、どうにもならない。人の弱みに付け込む連中だが、食い詰めてこんなせこい商売をしているのかと思うと気の毒だ。

**ほのぼの** 今夜の夕食はウエストフィールド・ショッピングセンター。地下の大レストランの店は10店舗あまりで数百の席がある。隣のテーブルでは若い白人夫婦がやんちゃ盛りの二人の男の子と一緒に食事、お兄ちゃんのほうは食べ終わって退屈している。両親に構ってもらえないので、床に座ったり、寝転んだり、テーブルの脚や父親の足を蹴っているし、弟の方は顔、手、シャツ、テーブルの上をヌードルの赤いケチャップで前衛的な汚し方をして、両親を困らせて喜んでいる。はたから見ている限りは実にほのぼのとした一駒であった。

パウエル駅からケーブルカーでパイン通りまで坂を登り、グラント通りへ下る。便利だ。フロントに毛布を追加するよう伝えた。昨夜はうすら寒く感じたが今夜は気持ちよく眠れそうだ。

#### 4月22日 火曜日 サンフランシスコ

02:55 こんな時間に目が覚めた。明日のヨセミテ行きに関連する英文のメモを作成した。

09:30 ホテルを出て、明朝の集合場所のウイルシャー・セント・フランシス・ホテルへ行く。日本の皇室御用達と聞いたが一流ではない。昔は一流だったんだろう。一流ホテルのドアマンはタキシードを着ている。フロントへ行き公衆電話の位置を聞いた。電話のコーナーで、英文のメモを並べ、おもむろにボタンを押した。パークツアーの担当が電話にでたので、やれやれ。日本語が通じる。昨日通話した内容を再確認し、参加するツアーに電話したいから、その電話番号を聞いた。いまさら嫌味をならべても仕方ないので、普通に電話をした。ツアーを挙行するドリーム・ツアーに電話し、明日のことを詳しく質問した。電話の印象では信用ができそうだ。ガイドは日本人、参加者も全員日本人だそうだ。

**銀行** 午後はカミさんが疲れたと言うので各自別行動することになり、私はシビック・センターへ行くことにした。まず、FARGO BANK でトラベラーズ・チェックを現金に換えることにした。パスポート、クレジットカードの提出と右親指の指紋採取という手続きが必要だった。アメリカン・エクスプレスの

チェックは手数料なしである。為替変動からは少しばかり損をしたようだ。所要時間 30 分は長い。銀行員も黒人ばかり。

JTB シビック・センターの手前に JTB の事務所があるニッコー・ホテルがあるはずなので、探していると、若い黒人が近づいてきて、何を探しているかという、ホテル・ニッコーはあそこだと教えてくれたが、チップをくれという。初体験。1 ドルあげたらサンキューといった。ホテルにはいると、地下のガレージの横の狭い部屋に JTB というドアがあった。日本人女性が一人いた。よく聞いたら JTB カードのサポートをしている会社で、JTB とは直接は関係がないといい、JTB の事務所はセント・フランシスのホテルにあったが、今はなくなったと言う。JTB が発行しているガイドブックには、そんなことは書いていない。あきれた JTB だ。落ち目なのかな。日本の新聞でも読もうと期待していたが...

**昔の栄華** シビック・センターの辺りは治安が悪いという案内どおり、黒人の浮浪者と、徘徊者ばかりである。シビック・センターは市庁舎を中心に、州、連邦の役所や裁判所、博物館の巨大なビルを整然と配置している。荘厳な雰囲気を出していると思う。大きな銅像などが立ち並んでいるが、そこにはすえた臭いを放っているホームレスがいて、違った意味で近寄りがたい。市庁舎は石造建築で、塔や窓枠、縁取りは黄金色に輝いている。金採掘で沸いたサンフランシスコの財力が垣間見える。ロックフラワーやフォードなどアメリカの 8 大財閥がサンフランシスコで生まれたそうである。ホテルまでは 2 キロメートルくらい、途中でビールを買って戻る。

スシ カミさんは、近くのチャイナタウンでウインドウショッピングをして、先ほど帰ってきたところだといった。私はシャワーを浴びたら夕食のため出かけるのが億劫になった。カミさんがホテルの対面にある「すし・ロック」という店でテイクアウトできるかどうか、行ってみるわと、部屋を出て行った。しばらくしてビニール袋を提げて戻ってきた。「すし・ロック」は中国人経営の店で寿司のほかにいるのメニューがあり、「どれにするか？」と聞かれたけどわからないので、カリフォルニア巻というのを一人前買って来たと言った。アボガドとほぐした蟹の身を海苔で巻き、それをご飯で巻いた中くらいの巻寿司である。つまり日本の海苔巻の反対版で、外側にはゴマをまぶしていた。スシ飯ではなかったが、米は日本米に似ていた。味噌汁がテイクアウト用のカップに入れてあり、醤油をつけてあった。量は多く、この一人前を二人で食べて満腹となった。アボガドをスシのネタにした話を聞いたことはあったが、なかなかおいしかった。

---

## 4月23日 水曜日

### サンフランシスコからヨセミテ峡谷へ

05:30 起床 06:50 サンフランシスコのホテルをいったんチェックアウト、手荷物 2 個を預けた。25 日再チェックイン予定。07:10 集合の場所ユニオン・スクエアのセント・フランシス・ホテルまでは 10 分、フロント前のロビーに数人の日本人がいるので、ご一行かなと思っていると、ジーパンにヒゲの男が現れて、挨拶し氏名を確認し、ドリームツアーのバスに案内しますという。裏通りに停車していたバスには、すでに皆さんは乗車済みで、このホテルからは 4 人が乗った。後部しか席があいりていなかったが、二人席を占領してくつろいだ。07:21 発車、29 人のツアーだが、ヨセミテ泊まりは 4 人だけ。ほかの人たちはヨセミテの 2 時間ツアー (実質 1 時間) のために、14 時間のドライブをするのである。

自称クマさんはガイド兼ドライバーで、どことなくクマのプーさんに似ていて愛嬌がある。バスがベイブリッジを渡り、車の混雑がなくなったあたりからガイドが始まった。以下、その説明概要。

『この近くに、ハーバード大学と並ぶスタンフォード大学があります。その敷地はサンフランシスコの半分以上もあります。この大学は大陸横断鉄道を建設したリーランド・スタンフォードという方が寄付しました。息子さんが15歳で亡くなられたので、それで作られました。学生のための結婚式場もありますし、最大10万人を収容する野球場があります。ここの一帯はシリコンバレーといわれていますが、ほんとうの名前はサンタ・クララ・バレーですコンピュータ・テクノロジーの故郷です。

サンフランシスコは19世紀の黄金ラッシュでアメリカ第1のお金持ちになりました。8大財閥の発祥の地です。初めて自動車のオートメーション工場に成功したフォード家やジーンズのリーバイスやロックフェラー家もそうです。ブロードウェイ、ストリップ、ヒッピーもサンフランシスコから生まれましたよ。ヒッピーというのは金持ちの子供が境遇に飽き足らず、世界を見て回った連中でした。その後成功しても、髪を長く伸ばしている団塊世代の人たちがそうです。その人たちは「男は自由の戦士、女は花を愛する乙女」といわれていました。インドでマリファナを吸って目が覚めたのがビートルズです。

カリフォルニアの人口は4,000万人で、増えています。物価は高いです。家は日本より高いです。昔は安かったけど、今平屋で1億円はします。郊外は安い。家売って、2キロ四方の土地を買った人もいます。私も2000万くらいのお金で買ってあげばよかったと思っています。(片側7車線の高速道路、高速電車の線路が中央分離帯にあり、走り去った)

サンフランシスコは世界3大夜景に数えられています。ネオンは一切ありません。禁止されています。

ヨセミテは世界初の自然保護区となりました。1864年のことです。その後、イエローストーン、グランドキャニオンとともに国立公園となりました。

霧のサンフランシスコ、チャイナタウンは有名ですね。沖の寒流から霧が流れてくるので、夏は暑くなりません。気温の年間寒暖差はプラスマイナス20度です。(摂氏だろう)それでゼンソクにいいらしいです。緑は3月、4月は花です。5月になると乾燥してしまいます。(風車発電地帯にかかる。左右の丘陵に数え切れないほどの風車があり、ほとんど止まっていた。:1万基設置されている。日本と規模が3桁くらい違うとを感じる。風車の丘陵を越えると大平野)

この大平野の開拓のため多くの日本人が入植しました。大半の人が農業で成功したそうです。中南米に入植した日本人が悲惨だったそうですが、そういう話はここにはありません。だから日本では日本人が多数ここに入植した話を知らない人が多いと思います。今では有数の穀倉地帯です。リンゴはフジです、ミカン、ハニー、オレンジの産地です。道端の花はルピナス、ここではルピンといいます。今どこにでも咲いています。何十種類もあるそうです。どうして農業に成功したかという、ここはハリケーンも竜巻もないからです。経営が安定しています。ここから20キロメートルは直線道路になります。まっすぐな道です。今日は曇っていて、シュラネヴァダ山脈が見えませんが。(08:20)

トヨタのカムリは3,000ccです。アメリカでは時速150から200キロで走るので、大きなエンジンじゃないといけません。大きなエンジンの方が燃費がいいのです。軽自動車は無理ですね。

右にゴルフ場が見えました。この牧場主専用ゴルフ18ホールですよ。左はアーモンド、アーモンドの生産はここが世界一です。レズン、ぶどう畑ですね。ここいらの畑の肥料はだいたい堆肥です。牧場から引き取って作ります。そのシーズンは過ぎましたが、まだその臭いが残っています。化学肥料は使っていないと思います。アンズ、クルミ、プラムも栽培されています。日本のミキ・プルーンは昨年撤退しました。人件費が安い中南米に拠点を移したと聞いています。ひとつの畑は数キロメートルから10キロメートルはあります。蜂、養蜂も盛んです。農業には蜂が必要です。これからトイレ休憩しますが20分です。』

08:34 下車、ファーストフードで朝食 09:00 発車 坂道というか標高があがっていく。花みずきが咲いている。いつのまにやら山が接近してきた。雨は小降り、そして晴れた。ヨセミテ高原の入口のひとつであるマーセドの名前がついているマーセド川はヨセミテ・サウスコルが源流である。今はかなりの水量であるが、夏には水が枯れるそうだ。だから、夏休みに出かけたらヨセミテ滝は見えないということ、こんなことはガイドブックに書いてない。ひどいと思う。滝と水がウリなのだから、旅行者をがっかりさせては悪いではないか。

10:17 山道片道 1 車線で停車、土砂崩れで片側通行らしい。

しばらく走って、峡谷展望台 Valley View でカメラ撮影。ヨセミテ峡谷を一望できるところ、険しい山々が大きな谷を隔て連なっている。対面中央に小さな滝が一条見えた。Bridalveil Fall、ブライダルヴェール滝。

10:30 今日から 2 泊するシーダ・ロッジ (Cedar Lodge) の横を通過、ヨセミテ・ビレッジから帰るとき、ちゃんとこの宿に着けるよう前後をしっかりと確認した。ここで降りそこなったらたいへんなことになる。次のバス停は 25 キロ先だ。まあ、ストップと叫ぶ予定？だから、そうはならないけど。

10:37 ヨセミテ公園の入口通過、10:41 ゲート、そこで停車シクマさんは入園料を支払った。文字通り狭い峡谷に差し掛かった。谷川では真っ白な水流が大きな岩を噛んでいる。

クマさんの説明『この川の水は拭いてはいけません。そのままにしておくと、皮膚の保護膜となって疲れた肌のハレをとり紫外線除けになります。えーと、アメリカは自己責任の国です。日本と違いますから、自分で危険なところには近づかないように気をつけてください。』「クマさん、クマはいますか？」と声がかかった。『クマはいます。ここはクマの国です。ライオンだっています。アメリカ・ライオン、ピューマとも言います。』 10:45 ファイアーバード滝、10:50 カスケード滝、山には雪渓がたくさん残っていた。クマさんは『本日が最高』といった。『ヨセミテの天気を予報することは誰にもできません、天気だと思うと雨、雨だと思うと晴です。』

12:15 『ヨセミテ峡谷に入りました』、これまでは入口だったらしい。左にリボン滝、右にブライダルヴェール滝、滝の幅が広いので花嫁の長いヴェールをイメージしたのだそうだ。左の大きな一枚岩、高さ 1,000 メートルはエル・カピタン、ロッククライミングの名所でベテランが 1 週間かけて登攀するのだそうだ。この岩は全部花崗岩。中央の山がパッキリ半分に分れているのがハーフドーム、North Face というブランドもののシンボルになっているところ。私のリュックもノース・フェイスだ。ヨセミテ滝は 3 段になっていて、高さは 739m。

『ジャイアント・セコイヤの幼木が 1 本だけ、ここに生えています。幼木といっても 200 年はたっています。一日に 1,000 リットルの水を吸います。大木は 2,000 年、年論の成長は 1 年に 1 ミリ、枯れても 200 年は腐りません。ジャイアント・セコイヤはこの裏に群生地があります。皮を触ってください。とても柔らかいですね。これがこの木の特徴です。』全員が触感を確かめた。ふわふわしている。指を突っ込むことができる。夏季でないと巨大なセコイヤ(レッド・ウッド)にお目にかかれないので、残念、冬季は樹林への道がクローズされているのである。クマさんから、ヨセミテ国立公園の規則について詳しい説明があった。枯れた木の枝ひとつ持ち出さないほうがいいらしい。歩道では人より馬が優先というのも面白い。動物に食べ物にあたえたら罰金だ。

13:00 ヨセミテ・ロッジに着き、2 時 45 分まで自由行動となる。あらかじめ幕の内弁当が配られ、全員が車内で既に平らげていたので、1 時間 45 分も自由時間が取れたとクマさんが自讃した。実際、翌日の同じようなツアーの人たちは、このロッジで弁当を食べたため、昼飯時間込みで 1 時間 30 分しか自由時間はなかったのである。クマさんは出発時間が 2 時半のところ、ここから乗る人がいないからという理由で 15 分延長し、あるイベントを考えていたのである。弁当配りには東京の英語サークルの 8 人がクマさんに協力した。40 から 70 歳くらいで、派手なおばあちゃんが仕切って

いた。英語の先生は日本人で、このツアーには不参加、この人たちは団体ツアーのオプションでヨセミテを選んだのだそうだ。

クマさんは、ザ・アワニーに泊まる社長とその子分および私たちだけを車に乗せ、他の人たちには滝を見に行くよう勧めた。ザ・アワニーはヨセミテ一番のホテルで予約をとるのは至難だといわれており、クマさんも予約できたことには驚いていた。子分をぞんざいに扱うシャチョーの話によれば、旅行社が当初は別のところの予約したが、そこがキャンセルされたのでアワニーはどうかと勧められたということであった。とにかく国立公園内のホテルやロッジでは数年先まで予約されているところがあるほどらしい。私らの場合も、レストラン付きの部屋はとれず、やむなく、公園外のシーダ・ロッジを予約したのである。シャチョーは若いころ65日間もヨーロッパを巡ったそうで、英語も自信があるようだった。しかし、チェックインに手間取って、クマさんのサポートでようやくオーケーとなったので、4人を乗せてヨセミテ・ロッジへ帰った。クマさんは21年前に日本からこちらに来て、ドライバーを18年やっているそうだ。私たちには、ここでリュックなどを預ける際、親切にアドバイスしてくれ、25日は午後2時半にヨセミテ・ロッジのオフィスの中で帰りのバスを待つようにといった。

こんどはクマさんは一同を川に案内した。そこは穴場で人がめったに行かないところだという。15分ほど移動した。サザナミもない静かな砂の岸辺である。そこから見るマーセド川とハーフトームの眺めはすばらしく、絵葉書の光景そのままである。しかし、クマサンは景色の案内ではなく、この川の水の効能を説明したかったのである。

もう一度、いかに旅の疲れに効くかを説明し、靴下を脱いで裸足を水につけましょうと率先する。彼は平気な顔をしているので、皆さんも川へ入った。最初はそんなに冷たいと感じないで、10秒くらい漬かった。暖かい砂の上で乾かして、足を入れたら、痛い何のって飛び上がるほどである。それでも我慢して何度か挑戦したものの、水につける時間は短くなるばかりである。おそらく0だろう。岸辺には残雪があるのだから。また、顔に水をかけ、ハンカチを水に濡らし、畳んで首に巻いておくと、ハンカチは温まらず冷えたまま不思議である。大気が乾燥しているので蒸発の気化熱でハンカチがいつまでも冷えたままとなっているのだそうである。皆さんの嬌声でクマさんは大喜び、皆さんも痛かったけど大喜び。しばらく笑ったあと、ロッジに戻り、私たちはここで皆さんとお別れ。

バスは来るときは国道120号線だったが、帰りは山崩れのため、140号線だそうでシーダ・ロッジの前を通らないのである。カミさんがクマさんにお礼のチップをそっと渡した。かくして朝から行動をともにしたツアーの皆さんに手を振って見送った。そのあと、10分歩いてヨセミテ滝入り口、さらに滝の轟音が大きくなり5分で滝壺近くの木橋に至る。落下する大量の滝水は巨岩を白く噛んでいる。飛沫が顔に吹きつける。強い日差しの中、うっすら虹がぼやけていた。フリーになったので、ゆっくりくつろいで見物した。

ヨセミテはまだ夏季にはいらず、観光はこのヨセミテ・ビレッジだけである。夏季になると奥までのツアーがある。トレッキングだけでも延長1,300キロメートルもあるという。ビレッジの中は無料の大型バスが数系統ある。巡回シャトルである。それに乗ってビレッジ内を一回りした。

今度はヤーツ・バスに乗り、5つ目の停留所で下車しなければならない。往復のチケットを買わねばならない。乗り損なったら大事になるので、16:15と早めのバスにした。マーセドとの間に一日5往復しかないのである。ここでバスを待っていたフィラデルフィアに住んでいる同年輩くらいの小柄な白人夫婦と知り合った。「NBC」のタグをつけた真っ赤な大型のバッグを各自2個ずつもっていた。丸々太った奥さんが、自分は菓子創りのアーティストだと名乗り、自分の弟子が名古屋にいるので連絡してくれとメールアドレスをくれた。

定刻にバスがきた。空席が少ない。ドライバーに『シダー・ロッジでおろしてほしい。ラウンド・チケッ

トをください。』と言ったつもりだが、なかなか通じない。「オー、シーダ・ロッジ OK！フォーチーンダラズ」。15 ドル差し出すと、釣銭をさがしたがないので、「ザッツ OK」というと、ボールペンで自分の名詞になにやら書いて私に渡した。これが往復チケットだった。16:55 ドライバーはちゃんとシーダ・ロッジで停めてくれた。やれやれ。知り合いの夫婦に挨拶する余裕もなかった。（「アイム シニア」を叫ぶことを忘れていた。この夫婦には帰国後、映像を添付してメールした。）

幅 200 メートル、奥行き 100 メートルほどの敷地に 2 階建てのロッジが 5 棟と事務所、プールやレストランがある棟があった。その他は駐車場であるが、ガラガラだった。事務所はフロント兼売店で、白髭の老人と若い女性の 2 人がいた。チェックインは簡単で、218 号室の鍵をくれた。すべての部屋は入り口が外の通路に面し、日本のアパートと同じである。一番奥の棟の二階で 30 室くらいの木造建築である。外階段を上がって右に 2 つ目が 218 号室。かなり広い部屋である。入り口の円形テーブルがゆったりしている。右へ 5 つ目の部屋の外では若い男がサングラスをかけて読書していた。

ヨセミテで見かけた黒人はヨセミテ・ロッジのレストランの掃除夫の一人だけ、ヒスパニックや東洋人の従業員もいなかった。白人ばかりである。観光客は多くはなかったが、白人と日本人だけ。カミさんがレストランからテイクアウト(19 ドル)を買ってきて、私は売店からバドワイザーとワイン小瓶(5 ドル)を買ってきて夕食。レストランはヒスパニックばかりだったといった。カミさんは広い部屋なので、周りに気を遣わない夕食はリラックスできて、疲れがとれたと言っていた。私はのんびりビールをのみ、さて、明日はどうしようかと考える。頭の回転がさっぱりなので、とにかく、偵察、それからだ。すなわち、ワンパターンだが、シャトルバスで一巡し、適宜気に入ったところをマークして次に下車することにした。

明日のヨセミテ行きのバスは午前 6 時半の一番にすることにした。カミさんは「どうして、そんなに早いバスなの」と不満だったが、次のバスが、もしマーセドから満員だったら困るということを説明して納得してもらった。次に、明日の朝、ヤーツ・バスのドライバーとしゃべるメモを作ることにした。要旨は次のとおり。英語は恥ずかしいのでここで書かない。

『今日受け取った名詞のカードを見せて「このカードは昨日、ヨセミテからシーダ・ロッジにのったとき、ドライバーから受け取ったものであるが、理解できない。私はどうしたらいいだろうか?』』

---

#### 4月24日 木曜日 ヨセミテ2日目

05:30 に目覚まし時計をセットしたが、04:40 に起床。トレッキングの用意をする。雨着、双眼鏡、カメラ、案内書をリュックへ、登山用のステッキも入れた。

06:37 ヤーツ・バスに乗り、ドライバーに 14 ドル出しながら、ものを言いかけると、昨日のカードを出せといい、お金は要らないと言った。昨日と同じドライバーだった。なんだか知らないが、そういうことらしいので、「サンキュー」と大きな声を出した。なお、帰りは別のドライバーで、シニアは往復で 5 ドルということであった。やっぱり「アイム シニア！」と叫ぶべきだったのだ。07:30 ビジター・センターについたが、クロズドでオープンは午前 9 時とのこと。それで、カミさんがヨセミテ・ロッジのレストランで朝食にしましょうというので、ぶらぶら歩き始めた。途中、川があり木の橋に方から流れの音が聞こえてきた。昨夜の雨で増水し、川辺に残っていた氷雪が川一面にシャラシャラとぶっかりあいながら流れて音をたてていたのである。朝陽に輝いてキラキラしていたり、滅多に見られないであろう光景であった。それまで仏頂面していたカミさんが歓声を上げていた。ここを午後再び通ったが、もう普通の流れに戻っていて、氷雪の流れはなかった。まさに「早起きは三文の得」とはこのことだ。レストランに着く前に、ヨセミテ滝の正面に立ち、しばらく眺めた。



この撮影地点がどこだか確定できないでいたが、20 日後、写真と地図をにらんでいたが、思い当たることがあった。そして、カミさんの写真により、撮影地点の下流に石橋があるので、それが決め手になった。推理ゲーム。

**ヨセミテ国立公園**の概要をまとめてみたい。

カリフォルニア州東部、1851 年陸軍歩兵連隊の踏破で世に知られるようになり、今では年間 400 万人が訪れる人気の高い国立公園である。アクセスは鉄道、長距離バス、空路でマーセドへ、ここからはマイカー、ヤーツ・バスまたはレンタカーでヨセミテ・峡谷に入ることができる。夏季はフレズノからジャイアント・セコイヤのマリポサ・グローブに行くことができる。ら、4月には冬季で行けない。サンフランシスコやロスアンゼルスからは、日帰り、1泊、2泊のツアーがある。

**ヨセミテ・ビレッジ** 上高地を連想するようなところである。ここの標高は、1,230メートルだから上高地より低い。Sierra Nevada 山脈の高い山々は 4,000メートル以上で、富士山より高い山がゴロゴロしている。ヨセミテ・ビレッジから見える山々は 3,000メートル以下である。奥山を見るには夏季徒歩か馬で踏破しなければならない。

**見える山々**:ロック・クライミングの聖地エル・カピタンは 2307m、ハーフ・ドームは 2693m、ヨセミテ滝のポイントが 2114m である。

**ヨセミテ滝**:世界第何位かはわからないが、3段の瀧である。高さ 739メートル

**撮影ポイント**は Valley View から始まる。右に Bridalveil Fall、左に Ribbon Fall、左に Three brothers の山、左に Yosemite falls、右に Half Dome が順に見えてくる。

**エジュケーション・タイム!** 09:30 ヨセミテ・ロッジのレストランで朝食、25ドル 56セント。オートミル、フレンチトースト、コーヒー。快晴で一点の雲もない。シャトルバスでビレッジを一巡し、ビジター・センターの展示を見学、もう一度、シャトルバスに乗っていると、運転手が「エジュケーション・タイム!」言い下車してしまった。場所はどこかわからない。われわれの他の 10人は、ご一行さまで、リーダーかガイドかわからないが、その人が先頭に立ち、案内していた。

エル・カピタンの断崖にクライマーが二人登攀しているとリーダーの人が言うが、どうしても発見できない。背中リュックから双眼鏡を出して、くまなく観察するが、それらしき影はあるものの、どうしても確認できなかった。この一行に私たちはずうずうしくついていった。エル・カピタンの麓を川沿いに下っていったが、皆さんは留まって動かなくなったのでバイバイして、さらに下っていった。ところが寂しいところに入り込んで、さんだん不安になってきた。車も人気もない。バスから降りたところまで引き返したが、車の一台も通らないのである。この道路は工事中であった。しばらく上流方向へ歩いていくと、工事車両を使って作業している人たちがいたので、道を尋ねるともっと上流へいきなさいと教えてくれた。かなり下流まで下がっていたのである。シャトルバスでビジター・センターへ。昼食、6ドル 50セント。ザ・アワニーに行き、写真撮影、そこでオバちゃんから、センチネル橋からのハーフドーム撮影が一番いいと聞いた。しかし、そこがわからない。シャトルバスを乗り継ぎカーリ・ビレッジへ。ここはヤーツ・バスの始発停留所である。Curry Village は 2度予約して 2度キャンセルしたロッジである。バス付きの部屋がなく共同なので、カミさんが拒否権を発動した。カーリ・ビレッジでは通じない。カーリで通じる。(念のため発音記号をしらべたら、カーリだった。怪しいのは私だった。)ウオーターもダメ、ワラで通じる。英語とはアクセントで理解するものようだ。日本の英語はそこらを授業しないといけない。

**ヨセミテの宿** 16:00 発車、途中一方通行の待ち時間が長く、25分遅れでシーダ・ロッジに到着。カミさんが下のレストランからピフテキをテイクアウトしてきた。メニューで一番高いものを注文したそう。大きなピフテキにブロッコリー、にんじん、ズッキーニなどの付き合わせ、ポテトの丸焼き、パンそれに別容器にいっぱいサラダである。昨日のガイドのクマさんがサンフランシスコの牛は

放牧され、良い餌を食べているのでオイシイですよと言っていたが、アメリカにしては珍しく美味しいステーキだった。一人分 40 ドルで、二人が満腹できた。

星空を眺めようと、外へ出た。ものすごく冷える。パンフレットで宣伝している満天の星を期待したが、外灯が光っていて、期待は裏切られた。カミさんは、去年の冬の阿蘇、久住高原の星空はすばらしかったと呟いていた。私は寒くてノーサンキューだったが、惜しいことをしたもんだ。苦労しないで得しようと思っても、たなぼたみたいなことはありえない。敷地内は皆寝静まり、遠くからマーセド川のせせらぎが聞こえてくるだけ。

ヨセミテの冷えるロッジや旅わびし

The lodge getting cold at Yosemite Valley is dreary.

ここは、ヨセミテ・ロッジから車で 1 時間もかかるところで、国立公園外の宿泊施設では一番外側である。それでも立地環境としては申し分がなく、部屋は広く、調度品もまあまあで、清潔である。5 月から夏季に入る。峡谷の奥へのツアーも再開され、ホテルは賑わうことになるだろう。

---

#### 4 月 25 日 金曜日 ヨセミテからサンフランシスコへ

04:44 目が覚めた。 06:37 ヤーツ・バスでヨセミテへ。

08:00 ヨセミテ・ロッジのレストランでコーヒー、バナナ、アップル、富士は小ぶりで甘くて実に美味しい。丸齧りに最適。EXIT の近くに席をとったので、ドアが開閉されるたびに外から冷気が入ってきて気持ちがいい。シーダ・ロッジでは、朝 5 時の気温は 6 だった。手袋をしなくても冷たくない。昨日は 3 だった。ウエストバッグは肩から斜めに提げることにした。このほうが体を痛めつけないようだ。8 時半ごろカミさんは外を偵察にでていった。私は席でヨセミテ・ビレッジの略図を書いたりして、ここの地理を調べていた。その後、売店で、ちょっとした手土産を買う。絵葉書を買って、ラスベガスでお世話になった二人の女性と孫 5 人に、今ヨセミテで元気になっているとしたためた。ポスト・オフィスのオープンは 12:30 から数時間だけだそうである。切手代は日本へは 90 セント、ラスベガスへは 40 セント。

旅行 11 日目にして はじめてゆとりのある時間があり、ヨセミテ滝が一番よく見えるところのベンチに掛けて、ノンビリと、滝と人間を観察した。次々と人々がやってきては立ち止まり、滝を眺めて記念撮影しては滝壺を目指して歩いて行く。昨日は滝にもっと近いところで撮影したが、ここのアングルが最高ということがわかった。昨日はここで油絵を描いていた中年の女性がいた。1 時間余りアタマと体を休めた。地上では風がないが、千メートルも高いところではどうなんだろうか。中空から流れ落ちる水は一樣ではなく、さまざまな形に変わって落ちてくる。その模様は岩肌に影となってゆらいでいた。

ヨセミテの滝を眺めて日向ぼこ

Look at The Yosemite falls; and taking the sun.

断崖の影を揺らせる春の滝

The shadow of the waterfall of the spring appear in the cliff and shakes.

ナイヤガラとは違い、この滝は華厳の滝と同じような雰囲気を感じて親しみを覚える。もう一度、川に行き、ハーブドームとマーセド川の穏やかな様子を目に焼き付けた。

再びサンフランシスコへ 早めにヨセミテ・ロッジのオフィスの中のソファに腰掛けていると、2 時ころシマダさんが来て、午後 3 時半出発になりましたと伝えた。通行止めに合い、1 時間ほど到着が遅れたのだそうだ。15:30 発車、国道 140 号線を帰るのである。

皆さんが乗車したのち、シマダさんは、二人席を独り占めにしていた人に、席を替えてもらって、われわれの席を確保してくれた。帰路は国道 140 号線で往路の 120 号線の北側の道である。こちらは雄大な高原地帯を徐々に下っていく。シマダさんがガイドしていて、約 1 時間、車内の雰囲気は異様なことに気がついた。誰も一言も発しないのである。重苦しい空気、車内の温度が上がって暑いが誰もウンともスンとも言わない、たまりかねてシマダさんに調整するよう要求した。その後もダンマリは続いた。

シマダさんが、いつも使っているパーキングがクローズなので、別のところに車を止めます、トイレは使えるはずですよ、とオークデール市のスーパー「SAVE」の駐車場で休憩した。イチゴ、マンゴーとパイナップルを買った。トイレは「エンプロイオンリー(従業員用)」という表示があるドアの内側にある。例により、女性用の前はロングラインができた。男性のほうは誰もいないので、カミさんを誘導した。並んでいる人にも男性用が使えるよと呼びかけたが動かない。普通は反応があると思うのだが、ヘンな人たちだった。

午後 8 時半、サンフランシスコに着き、ハイアット・ホテルでバンに乗り換えグラント・プラザ・ホテルに送ってもらった。フロントには例のブスおばさんではなく、思いっきり軽い 40 そこそこの男性がいた。21:00 チェックインし、今度は 604 号室、グラント通り側の部屋である。帰り着いたという感じでシャワー。ヨセミテで買ったワインが半分残っていたので、それを飲んで気持ちがいい。カミさんは、ヨセミテでハガキを出した苦労話をしていた……。

---

## 4 月 26 日 土曜日 サンフランシスコ

今朝はゆっくり過ごした。09:00 フロントには若い娘がいた。明日午後 6 時に空港行きのシャトルバンの予約を依頼した。一人 15 ドルなので 30 ドル、ここにデポジットとして 10 ドル支払い、20 ドルをドライバーに渡してくださいと言った。10 ドル渡すと領収書をくれた。

13:00 ジャイアンツ球場見学のため、一人で外出。チャイナタウンのストックトン通りから 30 番バスに乗り、Baseball Park で下車。中には入れないので周りを一巡、往年の名選手のブロンズ像が立っていた。この球場は 2000 年建設、AT&T PARK という名称である。1958 年ニューヨーク・ジャイアンツはサンフランシスコ・ジャイアンツになり、以来ナショナルリーグ西地区で、ロスアンゼルス・ドジャースとライバルでありファンは犬猿の仲である。ベーブ・ルース、ルー・ゲーリッグ、ジョー・ディマジオなど日本になじみのある選手が輩出している。また、バリー・ボンズ選手の右翼席場外ホームランがサンフランシスコ湾の海上に飛び込むことで有名になった。

ジャイアンツ・グッズの店に入り、記念にボール 1 個を購入した。

## サンフランシスコの港湾

そこから、ミュー・メトロ(高速市内電車)、ダウントンは地下を走る電車でフェリー・ビルディングへ。ここは、昔サンフランシスコ湾を行き来する大型フェリーが発着した市内でも一番大きな建物であり、賑わったところであるが、現在はサンフランシスコを横断するベイ・ブリッジが架けられ、往年の賑わいはない。最近、土、日に農産物の市が立ち、テントの店が立ち並んでいる。今日も子供の楽隊が行進し寄付集めをしていたし、大変な混雑だった。広場では何とかダンスとか若者たちがパフォーマンスをやっていた。19 世紀の服装をしたご婦人がたが大きな帽子を被り優雅にゆったり歩いていたりお祭り騒ぎであった。この一帯は数十の栈橋が海中に突き出ているが停泊する船舶は 1 隻もいなかった。今はコンテナ輸送オンリーなのである。ドアツードアの時代で、海陸一貫輸送のため、積み替え輸送の需要はなくなったのだ。日本では漁船がウヨウヨいるが全く見

受けられない。その代わりどこにもヨット・ハーバーがあり今日も湾内は白帆が右往左往していた。

**鉄道がないサンフランシスコ** もう一つ、サンフランシスコには、鉄道が乗り入れていない。鉄道の駅はあるが、鉄路はない。バスでベイ・ブリッジを渡り、オークランド市から鉄路に乗り換えになる。また、埋め立てをやっていない。ゴミ処理はどうやっているのか調査するのを忘れていた。いろいろ考えることがあったので、乗り物 3 回とも金を払うことを忘れてしまった。申し訳ないないと思っている。30 番バスでは、運転手に「アイム シニアー」といったら、あごをしゃくったのでタダと思ったからである。ムニュー・メトロでは料金箱がなく、降りるとき改札口がわからないので、エンプロイオンリーから出た。最後のチンチン電車は考え事をしていて、人の後ろをついて乗ってしまい、気がついたが降りるとき払うのも何だから、払うチャンスを失ってしまった。

**世界 3 大夜景** 17:00 サンフランシスコの夜景は世界 3 大夜景だそうで、カミさんが楽しみにしていた。マーケット大通りの突き当たりの山、ツイン・ピークスからの眺めがコイト・タワーからの眺めより良いと聞き、そこへいくことにした。チンチン電車の「F」ラインで終点の、ゲイの町カストロに行き、そこから 37 番バスで山の頂上のすぐ下まで行き、そこから徒歩という段取りにした。これは A4 用紙の大きさの City Map San Francisco というマップから情報を得たのである。あいにくビジターセンターで販売している 2 ドルのマップが品切れで、これしかないのである。幸い、私は裸眼でどんな小さい文字でも読めるので助かった。山といっても丘であるが、開発が進み、頂上近くまで民家が押し寄せている。それでバスもてっぺん近くまで乗り入れているということらしい。人が一人歩けるほどの小道があり、木の階段や坂道を 5 分も登ると大きな自動車道にでた。そこはもう展望台である。ツインの丘の一つに登った。風が冷たい。そうそうに展望台でなるべく風が当たらないところを選んで日没を待った。ここからの展望はコイト・タワーの比ではない。絶景である。また、JTB もこの夜景のツアーを組んでいる。夜 8 時からベイ・ブリッジなどにも行くが、35 ドルである。カミさんが申し込んだが、満員で参加できなかった。それで一人 50 セントですんだのである。高校生などがバスで来ては去っていく。

日が落ちるに従いゴールデン・ゲイト・ブリッジの南側高地の影が市街地を東に伸びていく。17:30 を過ぎると、マーケット大通りの車の尾燈や対岸のリッチモンド市の町明かりが見えてきた。デジカメの ISO を 800 に設定して撮影した。20:30 まだ暗くなかったが、寒いので引き返した。

こういう暗さでは流石の高感度カメラも 3 脚なしではぶれる。はるばる日本から持ってきた 3 脚はアタマとアシが離れて壊れていた。肝腎のとき使えないとはと、身の不運を嘆きたくなる。坂道をおりたら、すぐにバスがきた。カストロでは男たちがここかしこに立っていて、気持ちが悪い。チンチン電車で終点のフィッシャー・マンズ・ワーフへ。ここでエビとポテトの空揚げを立ち食い。人だかりしているので、覗くとラッカーで絵を描いていた。興味なし。また、チンチン電車でカストロ行きにのり 4 丁目で降り、ホテルへ帰った。22:00。昼は暑かったが日が落ちたら寒くなった。優しいサンフランシスコとも今晚でお別れ。

花の色はうつりにけりなシスコ夏

The color of the flower has changed in San Francisco of the summer

4 月 27 日 日曜日

サンフランシスコ最終日 深夜ニューヨークへ

今日はサンフランシスコ滞在の最終日、ヨセミテ峡谷行きを挟み 1 週間であるが、夜中に出発なので、ロスアンゼルスと比べ、日程が楽である。これは格段にサンフランシスコにおける行動半径が小さかったということでもある。

ロスではサンタ・モニカやパサデナにも足を伸ばした。シスコでも、同様にすれば、郊外には、ゴールデン・ゲイト・ブリッジを歩いても行けるサウスリート、西のハーバードといわれるカリフォルニア州立大学バークレー校、シリコン・バレーにはスタンフォード大学、対岸のオークランドやサクラメント、ワインの里ナパの訪ねたいところだった。しかし、意欲がわからないところを考えると、疲れていたということだろう。

09:25 部屋からラスベガスのスミコさんへ電話したが留守、ミチコさんへは通じた。これまでお礼が遅れたことをお詫びし、ラスベガスでは楽しいことがいっぱいあったことをスミコさんにもお伝えください。これからニューヨークへ出発するといって電話を切った。

**モーター・ショー** 今日はカミさんが西海岸のクリフ・ハウスと美術館に行きたいというので、じゃ、その前にケーブルカー博物館がすぐ近くにあるから、チェックアウト前に言ってくると、一人で外出した。地図では、ホテルからパイン通りを登りストックトン通りへ右折し、シスコで最高のリッツ・カールトン・ホテルの前から左折したら博物館だと確認したつもりだが、それらしい建物が見えないのである。ワシントン広場を、ピッカピカのクラシック・カーが取り巻いていた。雑踏整理のお巡りさんにケーブル博物館へ行く道を探ねると、ワンプロック下がったところだと教えてくれた。

ここは、サンフランシスコ市内にいくつかある丘のうち、もっとも海岸に近いノブ・ヒルである。

広場の東側のフェアモント・ホテルがモーター・ショーの本部となっていて、道路いっぱいには赤絨毯を敷き詰め、風船を飾りつけていた。しかし、スピーカーの声もなく静かである。いいことだ。クラシックカーに興味がある人にとってはたまらなく楽しいようで、集まった人々は皆晴れやかでニコニコしている。

私の目を引いたのは、ボンネットを皮のベルトで締めている高級車がかなりあること、バックミラーがない車、前のガラス窓の下側が前に開く車、後部座席のその外部の後ろに開閉式の 2 人席が外に出せる車などであった。こういう車から、機能あるいはフォルムの美しさや人々のセンスの流行から変遷して、今日のようになったのだろうと考えた。また、昔のハリウッド映画にでてきそうなパナマ帽、白の背広、長いドレスの紳士淑女がいて、カメラにポーズをとっていたのが印象的だった。車を見て回るうちにワンプロック歩くのが億劫になって、ケーブルカー博物館見学を止めてホテルに引き返した。どうせ、スキー場のゴンドラのようにロープをぐるぐる回している装置だろうと勝手に想像して取りやめた次第。ホテルへ 11:30 帰る。

**太平洋のビーチと崖** カミさんはフロントの女の子が何かと親切にしてくれたので、チップを渡したいと考え、朝は無愛想なオバちゃんだったので、その人に頼もうと、お礼のメモと一緒に預けるつもりでフロントへ降りていったら、その女の子が出勤していたので、直接渡すことができたそうだ。しゃべるよりもメモと心づけを渡すと、とても喜んでくれたそうだ。

11:45 チェックアウト 手荷物をロッカールームに預かってもらった。ホテルの前のスシ・ロックに行き昼食。20ドル。

ストックトン通りへ登りチャイナタウンへ階段を降り、38 番バスでクリフ・ハウスへ。バスを降り、民家の前を歩いていくと家ごとにキレイな花が今を盛りに咲いていた。生まれて初めて見る花も多い。ゴールデン・ゲイトという名前はサンフランシスコ湾口の狭いところであるが、その南北は峻険な断崖である。クリフ・ハウスは断崖の家ということである。そこは断崖の南端で、前面にはシール・ロックという大きな岩がある。アザラシの岩ということだろう。その南はビーチで、たくさんの人出だった。泳いでいる人も多い。このビーチ一帯は、Golden Gate National Recreation Area である。クリフ・ハウスから遊歩道を北へ登っていくと、砂の荒地にもルピンははじめたくさんの種類の花が咲いていた。イーグル・ポイントという展望台に着いた。前に、東からゴールデン・ゲイト・ブリッジを眺めたが、今回は西からの展望である。絶えず霧笛がボーツと眠そうな音を出している。北海道の霧笛はお腹をゆすぶるので目が覚める。

展望台の一角に、日本海軍に撃沈された駆逐艦サンフランシスコ殉難碑があり、戦死者や戦傷者の名前が彫られていた。艦橋の一部が保存されていて、鉄板に多くの砲弾か爆弾の穴があいていた。ここから、美術館「Palace of the Legion of Honor」へ徒歩。近くにはゴルフ場があり、丘の上の見晴らしのよいところだった。この美術館の外観はパリのリージョン・オブ・オナー美術館そっくりで、寸法は4分の3である。ローマ時代の宮殿のような外観で、門の内側に前衛的なものとかロダンの「考える人」を展示している。時間の都合で鑑賞せずに退散した。

**ジャパン・センター** ここから再び38番バスで東へ、ジャパン・センターで下車。外観は大きな倉庫のように見えたが、どうやら裏から見たらしい。どんなところかと入ると、食堂街が中心である。すし屋には外人が押しくら饅頭で入っていた。暖簾は日本式、漢字やかな文字、メニューは英語。従業員は白黒黄色。外に五重塔がある。このあたりは高層ビルが少ないので目立つが、わが日本を代表するからには、もっとましなものであってほしいと感じた。チャチすぎる。そうそうに退散、ホテルへ戻る。

**英語のずーずー弁** 17:30 早めにシャトルバンが着いたので出発、先に書いたフェアモント・ホテルから一組乗せるのだという。ところがモーター・ショーをやっているからドライバーが困った。少し離れたところに停車してホテルの中へ迎えに行くと、入れ違いに白人夫婦がやってきた。ドライバーはあわてて戻ってきて顔いっぱい汗をかいていた。シャトルバンは定員が10人足らずだが、今回は4人だけ。私はドライバーに「Terminal Three」と指示したが、「Airlineは何か」と聞き返したので、「American Airlines」と答えた。そうしたら、インターナショナルの方へいくレーンに乗ったので、あわてて、「ノーノー、ドメスチック！」と叫び、彼はびっくりし、「ティースリー？、ティースリー？」と尋ねる。最初何を言ってるのかわからなかったが、「T 3？」だと理解し、「オーケー、ティースリー」というと、彼は安心した。「…チャイナ？」ともいった。「ジャパニーズ」。T-3に到着、このドライバーはまだ何かと発言を続けていたが、チャイニーズのズーズー弁英語には参った。彼は携帯電話でしゃべっていたが、中国語もずーずー弁だった。

**空港の待合室は寒かった** 18:00まだ離陸まで4時間もある。椅子にかけボケーッと至福の時間をすごした。ゆっくりチェックインしたので、何のトピックスもなく、パス。63ゲートにいき、ディスプレイを見ると、2時間半遅れという赤字が出ている。ずらり並んだ便で、なんでオレの便だけといいたくなる。何の説明もない。結局空港で6時間半ぶらぶらということになった。ところがだんだんと冷えてきたのである。カミさんは完全武装でマスクをして発掘前のミイラのように寝ているが、私は手持ちを出して着ても、寒くて眠れない。集まった乗客も椅子に座ったり立ったり、中には薄い毛布を被って家族4人が床にゴロ寝していた。旦那の靴下の裏にいくつも穴があったのがご愛嬌に映った。

子供が柱のコンセントにゲームの端末をつないで充電しながら遊んでいた。私もデジカメ電池を充電した。黒人の3人兄妹がいた。母と祖母は白人である。養子なのかも知れない。格別騒ぐということもないが、絶えず親たちにまとわりついてた。隣あわせの女学生が私にティッシュペーパーをくれという。あげると鼻をかんだ。色気もないが、鼻紙を他人にくれという神経は文化の違いなんだろうか。自転車に乗って警官がパトロールしていた。ヨーロッパの空港では、4輪のバギーカーで老人や障害者を運送していたが、ここは手押し車椅子だった。

待合室の椅子のことであるが、日本では長椅子のように一列に整然と並んでいるが、ここでは荷物置きなのか飲み物テーブルか知らないが、そんなのがあって、そこを中心に椅子と椅子とは十分な間隔をあけて5脚おいてある。椅子の背中と背中がくっつくこともない。肘と肘、頭と頭などが接触することを避けるよう配慮していると思う。しかし、ニューヨークでは違った。ところ変われば品変わる、さまざまである。寒いので、コーヒーを買いにいった。アメリカンは薄味で1ドル90セント、カミさんは2ドル70セントのカプチーノ、これは美味しい。

そんなことで時間を過ごし、29c、29e席に搭乗、隣の席は空いていた。28日午前1時離陸。前の席は7歳くらいの子供をつれた家族で、父親は140キロくらいはあるような大男、子供を横にして寝せたいのといい、私の席の横に移ってきたが、彼は遠慮して大きな体を通路側に倒し寝ていた。私は別になんとも感じなかったけど、カミさんは私が窮屈だろうと心配して眠れなかったそうだ。

春の夜は離陸を待ちて冷えにけり

The night flight of the spring; it become cold when I wait for a takeoff delay.

#### 4月28日 月曜日 ニューヨーク

飛行時間 5時間30分 ニューヨーク時間 09:30 ジョン・エフ・ケネディ(JFK)空港に着陸。昨夜は一睡もできず、頭が重い。ターンテーブルで手荷物を受け取り、椅子にかけて休んだ。

**手荷物がない!** とうとう手荷物が出てこない家族がいた。例の黒人3兄妹のファミリー(母親は白人なので養子らしい)である。母親があちこち歩いていた。最後は迎えに来たおじいさん(白人)が来て、一緒にどこかへ行った。パニックになっていると思う。昔、カナダのカルガリー空港で荷物がでてこず慌てた経験があるので、もし、初めての経験ならパニックだろう。荷物保険は250ドルくらいしか還付されないから、高価なものは入れてはいけないのだ。薬も機内持ち込みにしておかないといけない。私は爾来荷物がいくえ不明になっても仕方ないと覚悟しているが.....

**シャトルバン** さてと、腰をあげて、インフォメーションに行き、シャトルバンを依頼したら、あそこにいるから乗れと職員の黒人女性たちが指を指す。あわててそこに急いだ。空港からホテルにあらかじめ電話するつもりになっていたのに、すっかり忘れてしまったのである。シャトルバンには既に7人が乗っていた。われわれが乗って9人、満席である。ドライバーが「トウェンティワン トウェンティワン」という。21ドルということだったらしい。車内には料金にはチップが含まれていませんと貼り出してある。それで1ドル足して一人22ドル払った。ニューヨークはかなり強い雨が降っていた。ロス、シスコでの14日間は一度も雨に会わず、傘を使うこともなかった。雨の中、道路は渋滞し、空港からホテルまで2時間もかかった。渋滞とはいえ、人も車も信号無視、前が空いたら進むというのには驚いた。飛行機で眠れなかった上に、この渋滞の中、シャトルバンの窮屈な座席の2時間で疲れは限界にきていた。

**ニューヨークの宿** 私はホテルの住所と名前を書いたメモをドライバーに渡した。ドライバーは順にお客を下ろしてゆき、われわれは最後で、12:15に着いた。雨も小降りとなっていた。イタリア料理のレストランの隣には間違いないけれど、うらぶれた通り、うらぶれたレストランの隣で、入り口は1枚のガラスの扉があるだけ。

ホテルから受け取っていたメールを見ながら、指示のとおりに取り付けられているボタンを押した。すると早口の英語である。応答しないところを考えると、自動応答である。何度押しても通じない。そこへ若い男がやってきて、地下室へと降りていった。しばらくしたら、若い日本人女性が地下から上がってきて、どちら様ですかと尋ねた。それから、キーでドアを開けたので、手荷物を入れた。彼女は地下室が事務所ですから、そこでチェックインしますという。狭い急な汚い階段を10段下りて鉄の扉を開くと、食用油の臭いがした。物置のようなところである。厨房がみえた。また、鉄の扉を鍵であけると小さな部屋があって、事務机一個とソファーが一つあった。「ほかの電話に出ているので留守電話にしていました」「今村様は昨日の27日に到着されるのではなかったですか」というので、ブッチャー(保証メール)を見せると、どこやらに電話をして、「変更のメールを持っていま

すよ」としゃべっているの、行き違いがあったことがわかった。そこで4泊分764ドルをトラベラーズ・チェックとキャッシュで支払った。カードだと15ドル上乗せという。荷物はポーターに運ばせる。5ドルだという。お荷物を預かりますが1泊10ドルです。シャトルバンを手配する料金は15ドルです。などとお金のことばかりいう。体調が普通の状態だったら、おかしいことを言うなあと感じたと思うが、なにしろ一睡もしていないので、受け答えしただけだった。ポーターは予約制だというけれども、それじゃ困るので、アンタが手伝ってくれと、強引にポーターの代役をさせて、5ドルチップを上げた。カミさんは、この対応に対して相当に怒り、帰国後も腹の虫が収まりそうにない。ホテルのキャッチフレーズに『日本語が話せません』なんて、ブログに書いておきながら、留守電は英語、用事があったら、この電話でお願いしますという電話は赤電話(有料という意味)、かけたら出るけど英語の留守電で、別のところに電話してくれという、こんな誠意のない対応じゃアタマにくるのも当たり前だ。

私は断続的に居眠りをした。夕方左足が吊った。カミさんが抑えてくれ、ほどなく収まったので、周辺を散歩した。地下鉄の駅まで150メートルしかない。ここは便利なところだ。コンビニがあったので、水や果物を買ってきた。人心地がついたところで部屋を見渡すと、縦3メートル横2.7メートル高さ3メートルと狭い、両側に幅90センチの木のベッドがあるだけ。畳の部屋なら4畳半という見当である。そんなところに大人のベッド2台を入れているということになる。右側はレンガの壁がむき出しである。床は板。山小屋以下だなと顔を見合わせた。これが1泊191ドルなのである。ニューヨークは物価が高いと聞いていたので仕方がないと思っていた。専用のバスはあったが、いったん廊下に出て、キッチンの前を通り過ぎると専用の浴室があるのである。風呂に入り脚をもみほぐして寝た。カミさんはネットで写真を見て予約したのに、写真と全く違くと、かなり興奮して寝付かれず、誘眠剤をいつもの2倍飲んだそうである。午前2時半、「イタイ イタイ」の悲鳴で飛び起きた。今度はカミさんの脚が吊ったのだ。指先を反らせ、すぐ収まったので、湿布薬を貼っておいたが、本人はこの事実を否定した。しかし、湿布薬が証拠である。それでも、なかなか納得できなかったようだ。

4月28日は結婚記念日、しかも今年は金婚式の年にあたる。丁度旅行の日に重なるので、繰り上げて、カミさんの古希の祝いを兼ねて、成田のホテルで子供や孫を集めてお祝いを済ませていたのである。そうかといっても、やはり、こんな目にあうと愚痴のひとつもこぼしたくなるものだ。最悪の結婚記念日！

願わくば、これを境に良いことが続きますように！

#### 4月29日 火曜日 ニューヨーク

**哀れな一夜が明けた** 8時半目が覚める、サンフランシスコ時間は5時半である。寝覚めはよくない。エアコンと窓の間には、隙間がある風通しのいい狭い部屋、そして狭いベッドでも眠ることができれば用は足りるものだ。しかし、目が覚めれば、これまでダブルベッド2台の部屋ばかりだったので、わびしい限りである。普通のホテルでは、キングサイズかクイーンサイズのダブルベッド1台かダブルベッド2台の部屋がほとんどで、ヨーロッパや日本の部屋より広い。しかるにこの部屋は、その半分以下の面積なのである。壁や暖炉の跡から想像すると、ダイニングを2つに仕切っただけのようである。ニューヨークは物価が高いそうだから、仕方がないかこのときは諦めていた。

冷蔵庫とキッチンがついている。クラッカー、牛乳、ヨーグルトにバナナ、イチゴの朝食。外は雨、かなり冷え込んでいる。2階には3部屋あり、覗いてみると、この部屋よりマシである。4人部屋と6人部屋。メールによると、部屋は指定させていただきますと書いてあったので、クレームつけても言い争いになるだけだなと黙っていた。

**グレイハウンドのチケット予約** 明日はフィラデルフィアへ行くので、鉄道の駅とグレイハウンド・バ



ス乗場の確認をしておく必要がある。それから、マンハッタンの地下鉄とバスの Map を手に入れたい。とにかく雨でも関係ないところに行こうと、私はスキーウェアを着込んで外に出た。鍵は 4 つあり、部屋の鍵、2 階の鍵、玄関が 2 重になっていてそれぞれに錠がある。玄関はブリーカー通りに面している。右へ 150 メートル歩くと、緑灯の柱があり、地下へやっと二人が交差できる階段がある。そこにオフィスがあり職員がつめている。チケットの自動販売機が 2 台ある。緑灯は 24 時間職員がいるという標識である。そこで、メトロの Map を貰った。バスの Map は言い忘れてしまった。チケットの買い方を教えてもらって 7 ドルのワンディ・パスを買った。ものものしい改札口にカードを差込み「go」のサインがでたら、バーを押して構内に入ることができる仕組みである。出るときは押せば簡単に動く。昔、パリで私が入るとき黒人がくっついて通り抜けたが、ニューヨークでは左右と上部が鉄格子になっていて、よほどのことをしないと、不法侵入はできない。

マンハッタン島の地下鉄は南北に数本あり、北へいくには[uptown]、南へ行くには[downtown]の電車に乗ればいいから、まず間違うことはない。間違えても引き返すのに苦労はない。バスは[Manhattan Bus Map]によれば、52 路線(急行バス路線がダブっている)があり、3,4 ブロックごとにバス停がある。土地っ子は、南北は地下鉄、東西はバスと使い分けているようだ。マンハッタン島はいつも車が混雑しているようだ。事実、JFK 空港から少し回り道したけど、2 時間もかかった。バスレーンが確保されていて、その分マイカーは厳しいことになる。

なお、私はニューヨークとはマンハッタン島のことだと誤認していた。NEW YORK 州のことを言ったり NEW YORK 市のことを言ったり、かなりあいまいではある。埼玉の人間が東京ですというのはウソだが、ニューヨーク州であれば、ニューヨークに住んでいると言ってもうそではない。ニューヨーク市はマンハッタン島の中央部を占めている。大阪府と大阪市の関係らしい。おなじみのブルックリン、ブロンクスなどはニューヨークだがマンハッタン島ではないし、JFK 空港もはるか東である。マンハッタン島はミニ東京 23 区みたいな距離感である。ブリーカー通りからタイムズ・スクエア までは品川駅から東京駅までくらいである。東京駅に相当するグランド・セントラル駅は、タイムズ・スクエアまで歩いて 10 分くらい。

ポート・オーソリティ・バス・ターミナルまでもそのくらい。このバスターミナルの大きさは世界一である。ガイドブックには、短長期の 40 路線が発着しているので、目的の乗場まで、慣れない人が行くには至難のわざであると書いてあった。同じような階段やエスカレータが左右にあるので方角を見失ってしまう。グレイハウンドのチケットカウンターに並んだが、例により黒人女性は愛想もなく質問し、受け答えに詰まると、首を横に振って相手にしてくれなくなる。仕方なくうろろうろしていると、ディスプレイがあり、カミさんがボタンを押していると、時間表などが出てきて、どうやらいけそうなのである。時間表を確かめてメモに書き、もう一度列に並んで、メモを渡すと、今度は質問もなく買うことができた。予約には往復の発車時刻が必要なのである。だから、黒人、もっとちがった表現で書きたいが、女性は帰りの何時のバスに乗るのかと質問していたと考えられる。時間表くらい手元にあるだろうから、もう少し親切にしたらどうかとも思うが、無理だろう。今まで外国の皆さんは、こちらと視線が合うとにっこりし、口を開けば挨拶するので、日本人もかくありがたいなあと常々感じていただけに、裏切られた思いが強い。

**エンパイア・ステイツ・ビルディング** 国連ビル、グラウンド・ゼロ、エンパイア・ビルディングなどはどうかなあと考えたあげく、一番に高いところから眺めて、土地勘を養えるエンパイア・ビルディングに行くことにした。バス停を探してウロウロするより歩こうということになり、8 番街から 5 番街まで 42 丁目通りを東へ、33 丁目まで南である。2 キロ弱である。ビルの入り口は、なんの変哲もないが歩道に人が並べるように囲いのロープが張ってある。とにかく、高層ビルだらけで、いくら首を曲げて上をみても、ビルの壁が空に伸びているだけ。実に空が狭い。このように、歩道にロープを張ってあるものの人はいない。しかし、ビルの中に入るとコンクリート剥き出しのホールがあって、大勢の人がいたので、わけはわからないが並んで待った。

少しずつ進んで、仕分けされて階段を上ると、ボディチェックされ、チケット売り場へと進む。パスポ

ートが必要。シニア料金は 17 ドル。そして、豪華なロープを張り巡らした待合室、といっても並ぶところだが、折り重なってすすむ感じである。それから、2,30 人ずつ更に上の階に進み、エレベーターホールへの待合室に至る。そこは天井が低く、天井板がなく、配線等が剥き出しの殺風景の広い部屋である。ここのロープはお粗末であった。ここで、展望を終えた人たちがエレベーターで降りてきた員数だけ 展望台へのエレベーターに乗せるのである。だから、展望台の定員が常に一定数以下に保持されるよう、ここでコントロールしているのであろう。

1時間以上待って 86 階の展望台に上がると、そこは丸い展望ホールであるが、座る椅子はない。床に座りこんでいると、すぐに警備員がやってきて、立つか降りるか誘導するのである。お客の回転第1である。ホールは全面ガラスであるから、雨風が強いときは、ホール内から展望するのだろう。朝は雨模様だったが、晴れ上がって、カミさんは「私は晴れ女だから」と何度も威張っていた。ドアから外の回廊にでる。風は強い。自殺予防の金網がある。カメラを金網の外に出して撮影できる程度の目の粗さである。びっしり人が張り付いているので、人の流れで押し出されるように前に出て、西から左回りに回廊を一回転した。混雑しているので、余韻を楽しむ余裕はない。それでも、南西に自由の女神があり、グラウンド・ゼロ地点を教えてもらい、西のハドソン川が青いことを確かめ、北のセントラルパークの一部を見ることができた。

日本でも高層化が進み、格別感激するほどのことはなかったが、ここからはほとんど緑が見えない。市中を見る限りたくさんの街路樹があるけれども、見渡す限りコンクリートかレンガ色ばかりである。これは、一つ一つのビルが数十階、低くても数十メートルの高さがある、ビルの谷間ではどんな大木も見えないはずである。マンハッタン島の南部は金融街で盛り上がり、中央部はロックフェラー・シティやタイムズ・スクエアで盛り上がり、北の方はなだらかである。ただし、これは土地の高度ではなく、ビルディングの山の盛り上がりを表現しているのである。雨上がりで若干霽があつたし、強烈な西日で、逆光となっている南方面は、それに見合った撮影をしなかったので、撮影は不出来だった。自由の女神像はいくら望遠にしてもきれいに撮影できなかった。広大なセントラル・パークもビルの間で一部分が見えただけだった。

**グラウンド・ゼロからタイムズ・スクエアまで** 次に、グラウンド・ゼロを目指して、バス Map を広げると、「1」番バスであれば、乗り換えなしで行けそうである。グラウンド・ゼロとはテロ攻撃で倒壊した World Trade Center のツイン・ビルの跡地である。地下鉄のほうが早く行けるが、バスは街を眺めることができるのである。いい気持ちで乗っていたら終点とのこと。どうも様子が違うのである。日本人町みたいだ。漢字で店の名前がでているし、ゴミゴミしていて店が開けっぴろげであり、アメリカ的ではない。聞いてみるとイース・ビレッジであった。改めてガイドブックを開くと、東海岸というカイースト・リバーが近くにある。アンダーグラウンド的な雰囲気、ライブハウスや古着屋が多いとか日系レストランや日系スーパーなのが集中しているとのこと。歩いた感じでは、雑多な商店が立ち並んでいるので、台湾やマレーシアの市場を連想した。(東南アジアでは台湾とインドネシアしか知らない)スーパーではなくコンビニだろう。昔の日本の場末を連想させる。1番バスには、イースト・ビレッジ行きとサウス・フェリー行きとがあり、この日はサウス・フェリー行きは運行しない日だった。こういうことは Map ではなく、説明欄に書いてあることで、帰国後に読んで理解した次第。北には、ハーレム、スパニッシュ・ハーレム、南には世界一のチャイナタウン、リトル・イタリーがある。わがホテルはリトル・イタリーの一角にある。欧米系人種は、ここかしこで郊外へ駆逐されているようだ。

ここで買った弁当を下げて、バスを探し、15 番で最南端の South Ferry へ行った。ここでは、大型フェリー4 隻がひっきりなしにスタッテン島と往復していた。地下鉄1, 2, 3, 4, 5, 6号線から絶え間なく人が流れ出し、フェリーからも 15 分おきにどっと人が流れ出していた。大きな待合室ではあるが、椅子は隅っこにいくつかあるだけで、あとは人が流れているのである。待合室ドアの外の縁石に腰を下ろして弁当をつかい、あたりを散歩した。南西の海上に自由の女神像が聳えるリバティ島とその北にエリス島が見えた。ハドソン河口、北ニューヨーク湾の平べったい小さい島で、建物

はみえない。距離はないのに、霧と逆光でよく見えなかった。フェリーのビルディングの隣はバッテリー、旧兵舎である。昔はこうした港には砦や兵舎があり、今でも地名として残っている。南はStaten 島、大きな島である。東はイースト川、地下鉄が海底トンネル4本でブルックリン地区と結んでいる。少し上流に大吊橋のブリックリン橋が威容を見せていた。ここは有料の橋。地図では各地区間の航路がたくさん書き込んであるが、時間帯が違うのか、あまり船舶交通は見受けなかった。警官が数人警戒に当たっていた。グラウンド・ゼロへの道を聞くと、指差して歩いて5分だと教えてくれた。

さて、相当歩いても一向にグラウンド・ゼロは現れない。ぐったりになったカミさんを待ちながら歩いて、やっと着いた。金網に囲まれて中は見えない。一部を残し再建中らしい。近くの地下鉄の駅まで歩き、タイムズ・スクエアまで北上し、ニューヨーク一番の賑わいを見物して帰ることにした。確かに人通りも多いし、ネオンサインも華やかであるが、何しろ暗い、そう感じる。やはり道路の幅が大きいので、電気の光線では限界があるのである。ヨーロッパでは人通りが少なくても、どのビルにも明るい華やかなファッション・ウィンドウが続き、歩道から見えるので、いくら寒くても楽しい。ニューヨークに限らず、ロスもシスコもそんなところはなかった。レンガが何か投げつけられてガラスを割られるのだろうか。今では、警官ばかりで夜歩きは心配ないようだ。とにかく、殺風景。人通りはおのぼりさんだろう。あてもなくさまよっているようだ。大劇場だって入り口は目立たない。しかし、中にはいれば華やからしい。ということで、市中散策には適しないというのが結論。

明日はフィラデルフィアに行くから朝早い。ケンタッキー・チキンで買い物して、地下鉄4番でブリーカー駅へ。午後10時帰宅。地下鉄の交通は慣れれば便利、それに危険性など全くない。ニューヨークの町は、どこにも警官が大勢いて安心である。

部屋にはいると、ベッドにメモがあり「鍵は入り口ホールの壁に取り付けた白いBOXの中へ投げ入れてください」とあり、さらに荷物の預かり料金を1夜10ドルと書いていたが、間違いで一人10ドルなので、40ドル支払ってください、と書き添えられていた。これにはカッときた。

『隙間風が入って寒い。布団が破れ汚れている。ベッドが寝返りするたびキシむ。テーブルの脚がグラグラ。テレビの配線が部屋にぶら下がっている。テレビのリモコンがダメ。荷物の預かり料のポリシーが不明瞭につき20ドルしか払わない。』と書いておいた。

がっかりして風呂にはいる元気もない。

---

## 4月30日水曜日

### ニューヨークからフィラデルフィアへ

朝からラーメン 05:30 起床 ラーメンは日本から携帯したもの、カミさんはバッグの底に、インスタントのご飯やラーメンのパック、生米、梅干、高菜の漬物の油いためなどを忍ばせていた。ロスアンゼルスホテルにはチンがあったので、ご飯のパックにパクつくことができたが、鍋がないのでラーメンも生米もニューヨークまでついてきたのである。ラーメンを朝からと思われるかもしれないが、日本を離れると日がたつにつれ懐かしく恋しくなるのが、日常食なのである。と控えめに書いておくが、日本食ほど美味しいものは世界にはないと思う。「ごはん」「味噌汁」「漬物」「醤油」に勝る食べ物があれば聞きたいものだと思う。アルコール類は特殊なものを除き、どこの国のもおいしい。果物はアメリカのものが格段においしい。朝からでもラーメンはおいしかった。それに美味しい果物をいろいろ。なお、生米は夕食に、鍋で炊いたそうである。(その後、電気釜があるのに気がついたとのこと)

**フィラデルフィアへ** 鍵とメモを結び、入り口の BOX に入れここを出た。地下鉄でバス・ターミナルへ。チケット購入も慣れれば何ていうこともない。となれば 10 時発予定なのに 8 時前に着いてしまった。8 時のバスに乗れないかなあと考えていたが 8 時半になっても改札が始まらない。よくよく読むと 8 時発のバスは、水曜日は除くと書いてあった。9 時前になり、並んでいる人たちの改札が終わったので、改札へ行って前倒しで乗せてくれと頼むと OK であった。カウンターで手続きすると、15 ドルのキャンセル料をとられるのだ。運転手に頼むと無料で乗り換えられるのだ。ロスアンゼルスからラスベガスに行くとき、スミコさんとミチコさんがキャンセル料を取られたとボヤいていたので、賢い選択を実行した。

09:00 発車 11:00 過ぎフィラデルフィアのバス・ターミナルに到着、ここで昼食をとり、タクシー溜まりに行き、パイン通り 18 丁目という、黒い連中は知らないという、そしてタクシーの列外にいた City Taxi に聞けといいながらせせら笑った。どうやら近いので行きたくないらしい。グリーンタクシーはスパニッシュで快く荷物も載せてくれた。チップ込みで 10 ドル。

**フィラデルフィアの宿** パイン通りは、高い並木があり赤レンガ造りの 4 階建てがそろった静かな落ち着いた町だった。交差点から 2 軒目の玄関に、小さな「La Reserve」という白い表札がでていた。どこの入り口も階段を 3 段上ってドアという形式で、カナダのトロントで泊まった B&B とよく似ている。イングランド式と思うのだが... インターネットで調べたところ、1800 年代の建造物。ここで 2 泊の予定。明日はワシントン日帰りだから、忙しい。

ベルを押すとドアが開いた。ドアから真直ぐに廊下がのびていて、突き当たりがフロントになっている。廊下の左はリビング。若い黒人がてきぱきとチェックインの手続きをした。カミさんがオバマみたいだと気に入って、チャンスを見てオバマに似ていると言いたいといった。ヨンさまに惚れたりオバマさまに惚れたり忙しいことだ。ホテルのポリシー(規定)の説明が終り、2 階の部屋に案内された。クラシックな部屋でびっくり。階段も映画に出てくるようなマホガニー製、ドアは手前左にあり、そこから入ると右がバスルームである。

バスルームは幅 2.2メートル、奥行き 2.7メートル。読書コーナーやちょっとした書斎となるスペースがある。天井には大きな年代もののシャンデリアがある。立派な額に入った花の油絵が 7 枚。蔦で編んだ衣類籠と椅子がある。洗面台はクラシック。トイレとバスは今のもの。広いベッドルームには人物画の油絵が 6 枚、机 2 脚、ソファ 2 個、大理石の暖炉(昔のまま)、ベッドは幅 2 メートル。床はペルシャ絨毯、さすがに 100 年以上使われて、かなり摺れていた。カーテンもクラシックで優雅と申し分はなかった。これでニューヨークの部屋より安く 182 ドル。

**旧首都フィラデルフィア** ガイドブックによれば、市庁舎からの展望が素晴らしいとのことなので、そこを目指すことにし、14:00 出発、徒歩。フィラデルフィアの町並みも暮盤の目のように整然と並んでいるので、まず間違えることはない。18 丁目は南北の通りで、市庁舎は 15 丁目であるし、一番大きい一番高いビルなので、どこからでも見える。市庁舎塔の高さは、計画し建設中までは世界一だったそうだが、途中でエンパイア・ステート・ビルが建設され完成してしまったので、世界一の栄冠を手にする事は叶わなかったのである。しかし、石造としては世界一だそうだ。

フィラデルフィアは、ペンシルバニア州でニックネームはキーストーン(要の石)、イギリスのクエーカー教徒が上陸した地点である。第一回大陸会議で自由、平等、博愛を高らかに宣言したところであり、自由の鐘が鳴らされ独立宣言が発せられた由緒ある市である。

18 丁目を北上すると、Rittenhouse Sq という小公園があり、マーケット大通りに至る。この通りは銀座通りのようなもので市の中央を東西に走っている。City Hall には簡単に着いたが、展望台に登る手続きがさっぱりわからない。チケット売り場まで辿りつくには延べ 10 人には聞いた。チケット売

り場では、まず登録、その次がシニア3ドルを払うところがある。そして、エレベーターへ行き、順番を待つ、領収証を見せて7階に上る。7階からエスカレーターで上り、第2エレベータ、これはタワーを真直ぐ上がるもの。黒人の案内人、われわれと白人男性2人。はじめ石造の塔、途中から鉄骨つくりの塔となる。展望所は外に出ることはできないが、すばらしい天気であった。10分足らずで降ろされた。

フィラデルフィアはペンシルバニア州で、デラウェア川沿いの都市である。東岸はニュージャージー州。イギリスからの独立を宣言し、1790年から1800年までアメリカ合衆国の首都であった。独立記念館、憲法記念館、自由の鐘記念館、旧国会議事堂などがある。シティホール・タワーからは、デラウェア川にかかる大吊橋のベンジャミン・フランクリン橋が見えた。このあたりも再開発で高層ビル建設がラッシュであり、これらに遮られて眺望がいいとはいえない。

PHLASH フラッシュという小型のシャトルバンが市内の観光ポイントめぐりするので、それで回ろうと思ったが、バス Map が手に入らず、お互い疲れたのでホテルへ戻ることにした。

ワシントンへの旅は取りやめ 帰り道、小さな店で、ヨーグルト、果物を買ひ、ショーケースの中にハムやサラミの丸い塊が見えたので、白人の女性にサラミをスライスしてくれませんか？と頼んだ。「1ポンド オア ハーフ？」と聞き返されたので、クォーターと答えた。ワインの店を聞くと奥からダンナが出てきた。隣の花屋に座っていたオバちゃんはサヨナラと言った。ここでは皆さんニコニコと日本人が珍しかったようだ。ワインを買ひにまた歩き回った。夜、カミさんが疲れたからワシントン行きはやめたいと言ひ出した。私も渡りに船と同意し、ワインを飲みながらフィラデルフィアでは浮浪者をみなかったし、ゴミが散乱しているところもなかったなあ、などと呟きながら寝たようだ。

---

## 5月1日 木曜日 フィラデルフィア

B&B の会話 ワインが効いて熟睡できた。起床の気分がいい。

07:30 Breakfast、前日にダイニングに置かれたノートに時間と氏名を書いて注文しておくことになっている。ダイニングに降りていくと、まだ誰もいない。テーブルはセットされている。ホストかホステスか同席するのだろうと期待していたが、その気配はない。

オーナーは来ないのだそうである。

若い女性が注文を聞きにきた。卵の焼き方、ハムかベーコンか、コーヒーか紅茶かとかである。10分後朝食が並んだ、簡単なトーストとその他である。半分ほど食べたころ、賑やかな声が聞こえ、やってきたのは、白人の熟女4人連れである。陽気なヤンキー娘のなれの果てという感じである。賑やかに挨拶し、少しばかり会話をした。この4人がどういう関係であるかは、しかとわからないが、雰囲気からしてハイスクールか大学のクラスメートらしい。全米の違った州から集まっていた。カミさんの隣に座った人が、とても早口でおしゃべりで質問してくるので、少しだけスローな会話なら理解できますという、早口でわかったと答えるので、一同大笑い。「あなたはいつも早口だ」と突っ込まれて、大笑いである。

しばらくして、30過ぎの日本人夫婦が加わった。男の方はかなり英語が達者だった。滔々と自分は美術館めぐりをしていて、今日はペンシルバニア博物館でモネ、セザンヌなどを鑑賞するのが楽しみだなどおしゃべりはじめ、まるで演説になってきた。こうした手合は私のもっとも苦手とするところで、早々に退散した。あと、どういう会話になったか知らない。さして教養が高いとも思えないオバちゃんたちの反応も知りたいところではあったが。

フラッシュという無料バス シニア無料のバスが今日から運行開始とはついている。今日はワシントンへ行く予定だったが、二人とも疲れが溜まっているので、ここでゆっくりしようと申し合わせた。とりあえず、マーケット通り5丁目のインデペンデンス・ビジターズ・センターで資料を手に入れようと考えた。2キロほどなのでぶらぶら歩くことにしてホテルを10時出発。しばらくすると、右の足首の少し上の筋肉が痛み出し、徐々に上に及び、太ももまで痛くなってきた。8丁目まできたとき、チンチン電車風のレトロ観光自動車の横腹に「PHLASH」と書いてあり、バス停も確認できたので、次のバスに乗った。車内の案内リーフレットを読むと「フラッシュ(バス)は5月1日から10月31日まで運行します。シニアはいつでも無料です。」と書いてあった。道理で昨日は探しても運行していなかったのだ。ワシントン行きは残念だけど、その代わりというのも何だけど「捨てる神あり、疲労神あり」なんてつまらぬ駄洒落をひねった。

フラッシュは、マーケット通りを東へ。デラウエア川が終点、「PENN'S LANDING」(ペンシルバニアへの上陸地点)という埠頭で

OLYMPIA, BECUMA, MOSHULU,  
SPRIT OF PHILADELPHIA

という4隻の帆船が繫留保存されている。デラウエア川の北にはベンジャミン・フランクリン吊橋が見える。ペンシルバニア州とニュー・ジャージー州を結ぶ大動脈である。フラッシュの発車時間が来て西へ向かう。「OLD CITY CULTURAL DISTRICT」はイギリスのクエーカー教徒が住み着いたところである。

ビジター・センターは、フィラデルフィアの昔と今を紹介するところである。このあたりには、この都市が米国の独立宣言をした首都であったことを明確にするための記念館が立ち並び、市民がこのことを誇りにしていることが、旅人にも伝わってくる。この誇りがすみずみまで行きわたり、ゴミ一つない浮浪者が一人もない都市づくりに成功してるいのではないかと思う。主な記念館は独立記念館、自由の鐘記念館、憲法記念館、国会議事堂記念館などである。

市庁舎タワーを見上げてマーケット通りから北西へ。パークウエー・ミュージアム地区を進むと、緑豊かなひろびろとした芝生のフランクリン科学博物館、ロダン美術館、一番奥はフィラデルフィア美術館が威容を誇っている。ここを一巡して帰ったが、さらに進むと動物園があり、左側にスクーキル川、ここを西に渡ると学園都市、すなわち、ベンジャミン・フランクリン大統領が創設したペンシルバニア大学都市である。

ショッピングセンターのフードコートに行き、遅い昼食を食べることにした。私はケンタッキーフライドチキン、カミさんは中国人の店のカリフォルニア巻きを買ってきて、分け合って食べた。カミさんが果物などを買いたいと店を探しに行った。同じ階の隅に食料品の何でも屋を見つけたと果物、ヨーグルト、小さい箱入りのカリフォルニア米を買ってきた。レジに若い日本人らしい人がいたので、「日本の方ですか？」と聞いたら「チャイニーズ」と答えたが、英語でいろいろ親切に教えてくれた。美味しい米はチャイニーズタウンに売っているとか、ワインを売っている店を他の人に聞いて、図を書いて教えてくれたそうだ。それからワインを買いに2ブロック歩き、買物袋をぶらさげて歩きながら、途中で公園に寄りたりして、本日は早めにB & Bに帰った。

帰ってから一休みしてカミさんが、日本から持参した土産を誰かに渡してくると、階段を下りていった。カミさんは海外旅行には、いつも日本らしい一寸したものを用意していくが、今までそれを渡すような人には出会わなかったもので、ここで渡しておこうと思ったようだ。以下カミさんの話である。

フロントには朝の食事を作ってくれた女の子がいた。「フー イズ オーナー」「シー リーブス

アザー プレイス」「ハウ メニイ スタッフ」「テン」カミさんはちりめんの布で作ったティッシュケースと匂い袋のセットを「ジス イズ フォーユー」とその子に渡した。他に「祭り」と印刷された赤と青の小型のウチワを4本持っていたので、スタッフに渡してくれと言った。そのやり取りしている声が聞こえたらしく、ダイニングの方からオバマさんが出てきて、メイドの1人も覗きに来た。ウチワのことをこれは暑い時に使うハンドファンだが、日本では祭りの時にこれを持って踊ると、手まねをすると、みんなが喜んだ。黒い人はあまり笑顔をみせないの、とつつきにくいと思っていたが、こちらから話かけると、気さくな人達だった。オバマさんが「Do you like fishing?」と聞いてきたそうだ。「My husband likes it.」と言ったが電話がかかってきたので、会話はそこで終わり。オバマさんは釣りが趣味だったらしい。その後、リビングの額や書棚、置物などを観察していると、朝食のテーブルで一緒だった例の早口のおば様がチェックアウトしていた。

他の人達はもう先に帰ったらしい。インディアナ州から来たと言っていたので、飛行機の都合で一人残っていたようだ。フロントのカウンターに、まだウチワが置いてあり、女の子があの人くれたと言ったらしく、カミさんのところに来て「ユーアー グッド パーソン」といって握手を求めてきた。その後、例の早口で私の主人と娘が日本語を勉強しているなど、まだ他にもペラペラとしゃべられたがよく分からなかった。その後その婦人は「ハブ ア グッデイ」と言って玄関を出ていった。

以前、カナダのプリンスエドワード島のB & Bでオーナーの奥さんや息子のマイケル君と大変親しくなり、今度もそれを少し期待して行ったが、オーナーは別の所に住んでいて、スタッフは黒い人ばかりなのは少々がっかりした。しかしnetの写真で見た高級住宅街の中のB & Bには間違いなく、高級住宅に住んでいた人達の昔の暮らしが想像できた。3階はキングスベッドルームとダブルスベッドルームが2部屋、2階と同じような作りで夫々にバスルームがついていて、多分ゲストルームだったのでは・・・？ 4階建、全部で8部屋がB & Bに利用されていた。想像力たくましいカミさんは、ここに住んでいた婦人は年老いて別の所に住み、ここをB & Bにしたのかもしれないと言っていた。

---

5月2日 金曜日

フィラデルフィアからニューヨークへ

今朝はニューヨークへ帰る予定なので、ゆっくりすごした。9時にダイニングに降りた。そして、昨夜朝食の予定表に記入しなかったことに気づいたが、係りの黒人男性が「ノープロブレム」と用意してくれた。この従業員は全員黒人だが、愛想は悪くない。チップ5ドル差し上げた。

11:00にタクシーを予約、5分前に来た。荷物を出し入れしてくれなかったの、チップ込みで8ドル。杖をつき、スタッフに感謝しつつホテルを後にした。以後日本に帰っても杖が手放すことがなかった。カミさんが転んだときのために用意してきた杖が、よもや自分の役に立つとは想定外だった。バスは12:01予約だったが、間違えて11:40のローカル便に乗ってしまった。ローカルといっても、1ヶ所寄るだけ。バスはかなりの速度でハイウェイを走った。道の両側は新緑できれいだった。13:42 ニューヨークのバス・ターミナル到着、地下の暗いところにある。エスカレーターで地上階に行き、そこからサクラ亭(ホテルの名前)に電話したが、繋がらない。地下鉄4番でブルックリン・ブリッジ、6番で駅3つ戻ってブリーカー駅。

ホテルのドアのボタン「Call + 1」を押すと、「今行きます」という返事があった。

不愉快なマルイという女性ではなく、もう少し若い女性が階段を下りてきて、今日はこちらの部屋になりますと、先日の部屋の隣部屋のドアを開けた。朝までいたフィラデルフィアと比較すると、やは

り山小屋である。それでも、先日の鶏小屋から掘っ立て小屋に昇格したような感じがした。隙間風も吹きこまないだろう。カミさんは口に出さぬが、また腹を立てているようだ。預けた荷物を受け取り20ドル支払った。嫌味の一つも言いたい但我慢だ。荷物を取り出したり片付けたり、フィラデルフィアで買ったカリフォルニア米を電気釜で炊いて、これで生き返った。キッチンだけはまあまあ清潔で、使うのに抵抗はなかった。

### メトロポリタン美術館

ガイドブックを開いていたら、メトロポリタン美術館では金曜日は午後9時半まで閉館しているとのことで、そこへ行こうということで意見が一致した。17:00ころホテルを出て地下鉄で北へ、E83丁目で下車、西へ3ブロックのところにある。セントラル・パークの中央東部に位置する。南北に4ブロックあるから長さが400メートル程度。正面階段は若い学生などがたくさん座って読書したり談笑したりしていた。最北端のドアから入ると、フロアの右に長い列ができていて、そこに並んだ。だんだん進んだら右へ曲がり、そこで、クローク、コート預かり所であることに気づいた。多いに照れくさかった。次にその横に列があったので、そこに並び前方を見ると、正面中央にカードのお客様オンリーの受け付けがあり並ぶことなくシニア15ドルで入場した。館内の案内図を受け取ったが、館内は広すぎて、自分の位置の見当すらつかない。1,2時間で全部みることができるとは思えず、それでいて、お目当ての美術品を英語で表現もできず、足の向くまま、気のむくままに歩いたのである。

個人の寄贈ごとに部屋割りをしているので、作家ごとにあるいは年代ごとに、あるいは絵画や彫刻ごとという点では、そうであったり、そうでなかったりする。もちろん要所にはきちんと分類して陳列されてはいる。しかし、近代絵画の名作で個人所有であったものでは、ピカソ、ゴッホやモネなどが他の作品に混じって展示されているのである。

ガラにもなく私は19世紀からのヨーロッパの絵画が好きなので、美術館の係りに聞くと丁寧に歩き方を教えてくれた。2階の南ウイングの中央部分は30くらいの区画に分かれて、寄贈者の名前がついた部屋である。絵画が中心でところどころに彫刻があった。そこを足早に歩いたが、フラッシュを焚かないかぎりクレームはつけられないようだったので、カミさんに命じて撮影した。私はカメラを忘れてきたのである。全く遣わない重いだけの望遠用カメラ、忘れるカメラ、間違いなく後期高齢者である。

あたりを見回すともう誰もいない美術館である。時計をみると8時半、閉館までには、まだ1時間あるはずだが、誰もいなくなるとソワソワなるもので、売店で絵画集45ドルを買い、出口を探して外にでた。81丁目出入口だった。あとで、見学の通路をたどってみたら、見学できたのは、たったの20分の1程度だった。ほとんど見ていないということだろう。

カミさんがバスに乗りたいというので、2番バスで5番街を南下、42丁目で下車、人ごみを楽しみ、ピザ屋に入った。本場仕込みらしく美味しかった。さらに5番バスでホテルへ帰ろうとバス停を探したが見つからず、地下鉄に乗った。なるべくたくさんの人が乗っている車両を選んだ。用心に越したことはない。

---

### 5月3日 土曜日 ニューヨーク

スフィンクス エジプトじゃあるまいし、何でニューヨークに出てきたのと言いたい方へ。歩くと右足が痛むので、今日も杖のお世話にならざるを得ない。スフィンクスは旅人に質問して答えられないと、その旅人を食べていた。その質問は「はじめは4本で、それが2本になり、最後に3本となるのは何だ」というものだった。正解は後期高齢者。杖が必要な老人というわけ。スフィンク



スは痩せこけた老人やブクブク水太りしたジジイを食いたくないために質問したいに違いない。わかるかなあ？杖っていいもんだ。ほんとに体を支えてくれる。だから、杖に頼っていたら、足腰が弱らと思った。

大きいほうのバッグの荷造りをして、出かける前に廊下にだして置いた。ポーターが玄関へ下ろすのだ。明日になればこの小屋とおさらばできる。複雑な気持ちがする。

**近くの果物屋** 近くを探訪しようと、いつもの地下鉄への道の反対方向に向かった。すぐにマンハッタン島を縦断するブロードウェイ通りにでた。だから1番バスに乗れば、南端に行く。東西方向はハウストン通り、ここに、マーケットという食料スーパーがあったので覗いてみた。朝だったので、果物を並べていた。きれいに拭い、ピカピカに磨いた赤いパプリカやトマトを1個ずつ丁寧に積み上げていた。見た目が美しく美味しくみえるし、実際とてもおいしい。日本のスーパーだと、買い物にきたオバサンたちが、果物を手にとって吟味した上で、買わずに無造作に置いていくが、こうも整然と積み上げてあると、上から順に買うということになるのではないだろうか。いくら日本のオバサンでも手に取ったものを雑然と置いていくわけには行かない。それほどに整然としている。カミさんがお魚コーナーで写真を撮ろうとしたら叱られたそう。

**歩行者天国** 表にでてハウストン通りをさらに東に歩いてみた。ラファイエット通りで1番バスに乗り北上(一方通行)していたら、歩行者天国の通りがあったので、面白そうだと下車した。はっきり覚えていないが、E14丁目通りだったようだ。左右の路上にはずらりと露天が並んでいた。相変わらず日差しが強い。私のは、色が変わるメガネだが、カミさんはサングラスを忘れてきて、眩しそうにしているので、入り口にあったサングラス屋で、紫外線除けには大きなメガネ、左右から光線が入らぬメガネがいいと買うように奨めた。12ドルのお買物、先のほうでは10ドルで売っていた。カミさんは一通り見てから買うべきだったと、いつまでも悔やんでいた。日本に帰ったらちょっとこれは目立ちすぎると、いつもの野暮なサングラスである。

お祭りの夜店みたいなもので、めばしいものはないものの、皆楽しそうに食べ物をほほ張りながら歩いていた。私は焼き鳥、焼き豚かな、1本でお腹がふくれるのを買った。4ドル。カミさんはフライドポテトラしきもの。

焼きトウモロコシ屋では、皮付きのまま焼いていた。ある程度焼けたところで皮を剥き、焦げ目をつけ、皮が串代わりになって、それを持ってかぶりつくのである。カミさんもこれにはグッド・アイデアと感心していた。初め蒸し焼きにして、それから焦げ目をつけると多分味がよくなるはずだとのこと。日本のように、醤油がこげる香ばしい匂いはしなかったので、塩かケチャップでもつけてたべるのだろう。

歩行者天国を往復して、ボワリー通りに出たらバスが来て、「City/ Hall 行き」と書いてあるので、これに乗った。行き当たりばったりである。12:20 ごろチャイナタウンに入った。英語で Bank of America、漢字で美国銀行などと併記していたり、中国国旗が掲揚されていた。最近ではチャイナタウンの勢いが盛んで、イーストビレッジの日本人街やリトル・イタリーは駆逐されつつあるという話を聞いた。12:50 シティー・ホール公園、終点である。シティー・ホールの塔はエンパイヤー・ステイツ・ビルディングから見た南の盛り上りの中央部である。

あとで写真を伸ばしてみたが逆光線のため市庁舎の塔は判別できなかった。この地区は金融街で高層ビルがびっしり立て込んでいる。ウォール・ストリートがあるところである。世界貿易センター跡はこの一角にある。City Hall Park は、観光バスのカメラ下車地点らしく、バスが何台も停車していた。皆さんがゾロゾロ歩いていく方向についていくと、ここにも歩行者天国があり西海岸のほうに広大な芝生の公園があった。

**トイレ事情** カミさんがトイレに行きたいというので、雑踏警備のお巡りさんに尋ねると、その美術館か、あそこのレストランにあるよと教えてくれた。ニューヨークにはどこにもお巡りさんがいて、道を

聞く場合役に立つ。レストランは「Under Way」というチエ - ン店である。確かにトイレはあるが、鍵がかかっているドアのノブを押しても引いてもびくもしない。コーラを買い、様子を眺めていると、店員に合図すると店員がリモコンでトイレのドアの開閉をしているのである。ドアは閉まったら店側からは開かないのである。しばらくここで休みながら観察していたら、賢い連中が現れた。仕掛けを知っているのか、たちまち仕掛けを見抜いたのか、一人が用足したら、ドアが閉まらぬようにし、次の番の者が入るということを繰り返していた。なるほど、子供というのは賢いな、パソコンだってゲームだって、教えなくてもちゃんと使えるわけだと、トイレのドアの開閉から連想した。カミさんにこんな話をしたら、うさんクサイ顔をしていた。クサイ話じゃないだろうと思うけど。

## ハドソン川巡航

店をでて、海岸線に行くと一帯は公園として美しく整備されて、紙切れひとつ落ちていない。北の方向は見える限りベンチが並ぶ護岸公園、バラック・パーク・シティである。住宅とホテルが公園の一部として整備されている。ここからは自由の女神も見える。対岸のハドソン地区の海岸に並ぶビルがなんとなく面白い。天気は曇ってきて、川の水は冴えない色だし、ビルも全く輝いていない。杖を突きながら、更に北上したら、海上タクシーの船着場があった。一人 12ドルで対岸めぐりができるというので乗船した。かなり多くの写真を撮ったが、どんよりした映像ばかりで、肉眼の印象より数段悪い出来ばえだった。船着場の陸側にはちょっとした公園があり、白いハナミズキが満開だった。その下で幼い子供たちが大勢楽しそうに声をあげ走り回っていた。こういう光景は、ほんとに心を和ませてくれる。こちらの写真は明るくきれいに撮れているのに、船の上から撮った写真はクラーイのである。

## ヒップホップダンス

ここから20番バスで北上、北上すればセントラル・パークに至る。セントラル・パークの入り口をちょっとだけ歩いた。風が強くて寒かった。毛皮のコートを着ている人がいるかと思えば、T シャツやノーリーブの女性がいたりした。路上のあちこちでミュージックがガンガンと鳴り、若い男たちが次々とヒップホップダンスをやっていた。見物人も大乗りで大騒ぎである。ヤンキー気質を垣間見した。われわれは騒がしいのが苦手、早々に退散した。

## ロックフェラー・センター

南下すればサウス・フェリーに至る。マンハッタン島の交通は、実に単純なのである。ニューヨークの盛り場は5番街42丁目周辺である。そこで下車しロックフェラー・センターに行った。ここには3キロにわたる地下街があるそうだが、どうせレストランと商店しかないのでやめた。ここには21の高層ビルがあり階数の総数は557階、6万5千人が働いているそうだ。トップ・オブ・ザ・ロックという展望台がある。また、地下に掘り下げたクリスマス・ツリーとアイス・スケート場として有名な万国旗で囲んだガ - デン・オブ・ネイションズを外から見下ろすことができる。夏季はレストラン、黄金の彫刻ネブチューンが輝いていた。

KFC(ケンタッキー・フライド・チキン)でワインの肴を買い、ついでにブドウ、トマト、ヨーグルトを買った。そしてぶらぶらと東へ、4番街から地下鉄で山小屋へ帰った。

そして午後7時夕食、ビールとカミさんが今朝つくっておいたおにぎり、KFCとヨーグルト。

20:00 ドアを誰かがノックした。マルイという例の女性である。一瞬緊張した。彼女も緊張しているようだった。「お荷物を玄関のところの柱をチエンで鍵をかけておきます。鍵は200で開きます」といい、お詫びの一言もなく、さよならの一言もなかった。私も「そうですか」といっただけ。私も何も咎めなかったが、のちのちのため、掘っ立て小屋を証明するための証拠写真を撮影した。抗議したいとも思うし、もう忘れたいとも思うし、という心境である。

**個人旅行もシンドイ** こういうことでニューヨーク見物は終わった。北のハーレムのゴスペルも聞きたいと思っていたが、いざ着いてみると、まったく、そんな気が失せていたのである。体調が原因だと思う。団体ツアーにガッカリしての個人旅行だったが、これもシンドイ体験だった。個人旅行はオーストラリア、カナダについて3回目である。これまでは、どこでも地元の暖かい人々との交流があり、旅を満喫できたので、今回の落差はひどいものだった。この国には根底に人種問題がある。ニコニコなんかしておられるか！という人々が町に住み、それを嫌がって郊外に逃げるように住んでいる人たちは、そこで楽しく美しく生きていることだろう。そういうハッピーな人々には出会えなくて、残念だった。

杖を突いて帰り、旅の記録を書き疲れ果てた。という情けない自分がここにいる。

---

## 5月4日 日曜日 ニューヨーク 機中泊、5月5日月曜日帰国

**いざさらば** 02:30 右足が吊った。すぐ壁に踵を押し付けてことなきをえた。危ないところだった。外が騒がしい、直下の1階のイタリアン・レストラン実は居酒屋から帰りかけたイタリアンたちが店の外に出て、オダをあげていたのである。延々と4時まで、4時で閉店となったので、皆帰り静かになった。深夜だけ営業しているようだ。

05:50 スーパーシャトルバンに電話したら、これからいう電話にかけてくれという留守番電話だったので、これ以上繰り返し電話するのをやめた。

ニューヨークの、アメリカでの最後の晚餐ならぬ朝食は、マフィン、バナナ、トマト、ブドウ、ヨーグルトと日本茶の豪華版。お寒い話だ。

冷蔵庫を開いたら、他の人のものが入っていた。隣の部屋と共同のキッチンだから、われわれが最初に寝た部屋に泊まっている人のものである。どんな気持ちであろうかと勝手に想像した。日本からニューヨークに直行した人なら、アメリカのホテルってこんなところかとびっくりしてもあきらめるだろう。われわれみたいに他の都市を巡ってきたら呆れて腹を立てるだろうなんて思った。

**空港へ** 昔の通勤カバンからモバイルを取り出し、リュックにいれ、カバンは捨てた。古いカバンよさようならだ、ニューヨークくんだりまで、役立たずのモバイルを運んで、ご苦労さん、最後までご苦労さん。玄関に降り、バッグのチエンをはずし、部屋のキーを白いボックスに入れた。ドアから外へでたとたん、イエローキャブがやってきたので、カミさんがグーチョキパーのチョキを出してストップ。カミさんは「Vサイン」だと主張している。ニューヨークの慣習らしいので真似してみたそうである。ドライバーは色は黒いがアフリカ系黒人ではない。行き先はJFK空港の8番ターミナルというと、アメリカン・エアラインですね。何時ですかなどと聞いてきた。自分は19年前にインドからやってきた。子供は4人いる。まだ寝ている時間だと笑った。いつもより空いていますね、といったので、日曜日だよ、というシェアーといった。料金は、空港まで45ドル、ブルックリン橋の通行料5ドルでトータル50ドルだそう。チップを10ドル進呈。空港で杖をつき、ブリーズ・ブリンク・イットといったら荷物を運んでくれた。キャリア・ブリーズというべきだったが、言葉はともかく杖をついていたので親切だった。混んでいると2時間かかるのにたった20分しかかからない。それで空港で時間をもて余すことになった。

ところで、このキャブはわれわれが降りるのを待つようにお客がついた。ドライバーはニコニコである。私は運転席の彼に窓の外から「ユーアーラッキーボーイ！」と笑ったら、右親指を立ててニコリした。

**E - Ticket のチェックイン** 前にも書いたが、E Ticket のチェックインは、自分では機械を上手に操作できなかった。それで今回は、時間はあるし自分でやろうとトライしたが、どうしても途中でつかえてしまうのである。ガイドブックには日本語でできる機械もあると書いてあったので、文字変

換のボタンを探したがない。あきらめて、係りの黒人に頼んだら、実に簡単にチケットが出てきた。あまりの早業に理解できなかった。荷物預けと一体のシステムなので、搭乗券とパスポートを見せると、どこへ行くのかという質問で、東京と答えると、「OK、2番ゲートです」。

出発ゲートにいてもどうしようもないし、ここにいても仕方ないしと、グズグズしていたが、ボトルの水も飲みつくしたので、ゲートに入った。ボディ・チェックは形式的、簡単だった。

外が見える席に座り、交代しては構内を歩いた。このあたりはアメリカン航空の専用ゲートで、国内線、国際線共用である。建物が新しく、床などは鏡のようにピカピカしていた。待合席の床のカーペットはそうではなかったが。

隣に小学校低学年と幼稚園児の女の子の二人を連れのお母さんの3人連れがやってきた。これから13時間の空の旅、大変だろうなと同情した。搭乗するとき、お母さんの旅券は緑の公用旅券、二人の子供は赤いパスポートだったので、外務省職員かその夫人かなと想像した。機内席は左側の2席で隣に他人がいないので気兼ねの必要がなかった。通路を隔てた中央席に親子連れが座った。

**嬉しかった帰国** 音楽を聴いたりビデオをみたりウトウトしていると食事だったりして、日付変更線をこえて5月5日のこどもの日となった。疲労はほとんど感じないで、定刻に成田空港に着陸した。これも風呂敷のおかげである。

14:30 手続きを終えてゲートを出ると、「おかあさん、おかあさん」という声がする。新座市に住む長女が亭主と迎えにきていた。私はバッグをABC航空へ持っていき、明日配達するよう預けた。予め往復運賃を支払済みだったからある。空港からは所沢直行バスがあり、3時半のバスで帰るつもりだったが、娘夫婦が運転する車に有難く乗せてもらった。5時半ごろ自宅到着、小さなバッグを運んでもらい、近くの椿茶屋へ、そこでは知人夫妻とばったりであった。

ふだんでもソバほどうまいものはないが、今日のソバは格別だった。

かくして、American Funny Trip は完了、明日からはこの日記と写真の整理というノルマに挑戦だ。

**サルが反省する以上** 外国に行くと、日本のいいところ、悪いところが、よくわかる。マーフィの原則をよく読んでおくべきだった。これが反省の総括である。

以下は個別事項。

日本人にだまされるな

URLの画像は実物よりきれいだ

パスポートはどんな検査のときでも、身につけておけ  
ウエストバッグは腰を疲れさせる、肩掛けにできるとよい。

バスや電車ではまず「アイム シニアー」と叫べ

個人旅行では、3日観光したら1日の休息日をとれ

新しい靴ははくな

靴下は厚く締まらないものがよい。

三脚か三脚の代わりになるものがないと夜景はとれない。

映像は一步前というが、一步下がって撮影し、あとで不要部分をカットすること。

不要な映像はカットできるが、撮影しなかったものは、後の祭りだ。多写せよ。(完)